

1月6日

「心の引き裂かれた者」

ヨエル 2:1-4

武安 宏樹 牧師

本書のテーマは「主の日」ですが、さばきだけでなく救いがコインの裏表で、11&12 節の間が分水嶺となります。「いなご」「天変地異」から出エジプト記を想像します。モーセが王と対決する災害は3回×3巡＝9回となりますが、感覚的不快から経済的損失、やがて人体から人命被害へとエスカレートして、最後10番目は初子皆殺し、頑迷と自己愛で主に敵対する者の成れの果てです。「罪から来る報酬は死」(マ 6:23)悔い改めて主の下に駆け寄る者は幸いです。10の災いを通過点として読むと、赤子救出～葦の海の奇跡から救いの栄光を、主の民に危機感を抱く王と対峙して、過越(⇒聖餐式)と共に読み取れます。さばきの背後に救いの御手、救いの背後で罪を見逃さないさばきが働きます。

1章は「悲しめ」「泣きわめけ」「断食せよ」「主に叫べ」と儀式的な悔い改めをさばきの激しさと悲惨さを前にし、身をもって応答せよと呼びかけられます。人間関係同様に神との関係も、ゴメンナサイと謝罪の姿勢を取るのは大事で、そうでないと伝わりませんが、何千回でもゴメンと言えば済むと見くびれば、エジプトの王と同じで全て失います。衣裂いても心裂かねばさばかれます。「しかし、今でも」の大転換は、軽んじられてはならないさばきが実は序論で、心からの悔い改めが駆け込み乗車と、7の70倍の赦しの可能を訴えています。異邦人でなく契約の民だから、ポーズではなく心と心で交わろうではないか。語弊を恐れず言えば主は「寂しがり屋」。「ねたみの神」(申 4:24)たる所以です。

直接交わりたいのに、気軽に断食や犠牲で済まされるのが、我慢ならない。いけにえ何度悔い改めても同じ罪を犯す弱さでなく、心の交わりをしているかどうか。ソッポ向いて偶像拝まれるのが嫌なので、諸災害で焼き尽そうとするのです。主なる神の恐ろしさは断罪以上にねたむ愛です。サウルは愛への不信で失脚。逆にヒゼキヤは敵国の恫喝に、衣だけでなく心を裂いて主に乞い求めました。憐れみの懇願だけでなく主御自身のプライドをかけた祈りに、主は答えられ、預言者の死の宣告も涙の祈りで抵抗、主は心動かしきやされた(Ⅱ列 19-20:)。まことに主は物言わぬ偶像ではなく、心から御前に出れば栄光を現される神。まず自分に、そして人間関係と隣人の救いに、世との戦いに行使しましょう。

1月13日

「この最後の人にも」

マタイ 20:1-16

田村 昭二 師

この箇所は「神の国」が「ブドウ園の主人」に例えられ、彼が労働者を探しに行く話です。主人は神様、労働者は信仰者です。

① 信仰者の喜び（2～7節）

ユダヤ人には、労働者を雇いに出かけた話はすぐにイメージできました。この例えでは朝6時から働く労働者と日当1デナリの契約を結び、9時と12時と午後3時からの労働者とは「それなりの賃金を」という事で契約しました。ただ夕方5時からの労働者は「理由」を聞いてただけで雇います。彼らは夕方まで喜んで働きます。これは10人10色の信仰者たちの導かれ方をさしています。

＊私たちの導かれ方を振り返ってみましょう。

② 信仰者の不満（8～12節）

主人は夕方6時過ぎ、最後の者から最初の者まで一律に1デナリを支払います。すると最初に来た者たちは、1時間しか働かない者と自分たちと同じ1デナリなので腹を立てたのです。もしクリスチャンが、若いうちに救われ奉仕した者と、晩年に救われた者が同じ永遠のいのちの恵みを受ける、ということに違和感をもつとすれば、それは、神の憐れみを共有出来ていないからです。

＊私たちも。忠実に仕えたから永遠のいのちを貰えると、勘違いしないようにしましょう。神からの恵みは絶対恩寵です。

③ 神の御心（13～16節）

8節に賃金とありましたが、これは賜物です。憐れみにより働かせてもらって頂いた賜物です。最初の者が最後の人に目を向けたときに愚痴ります。最初の人から愚痴が出たのはある種の妬みからです。主人の「平等に日銭を払え」という命令は申命記 24:15 の愛の律法を徹底したものです。この延長線上に愛の神の御心があるのです。

＊私たちはどうでしょうか。神の救い恵みは憐れみなのに錯覚していないでしょうか。

● 終わりに

最期に救われた人のように、自分がイエス様の愛で圧倒されているかどうかを点検したいものです。これが、神にのみに栄光を帰した「この最後の人」になる秘訣です。であれば、伝道の対象は若い人も老人も平等に力を注がなくてはなりません。

1月20日

「神を恐れる意味」

ヨブ記 1:1-12

武安 宏樹 牧師

本書は心を引き裂かれた者として、財産も家族も健康も全て取り去られて、苦難の底から主よ答えたまえと迫る、ヨブの想像を絶する格闘があります。ヨブは以上全てに恵まれただけでなく、潔癖と言えるほど罪を遠ざけました。客観的に見れば非の打ちどころの無い、十戒と律法を全て守り通したような、最高の信仰者が何故打たれなければならないのか。理解に苦しむと言えます。

ここで本書の謎を解明する上で見落としてはならない存在が、サタンです。神の子たちの会議に出席権も無いのに割り込んで、主に職務質問されますが、これは主が知らないのではなく、サタンの実体を知るからこそ名乗らせた。「地を歩き巡り～」全世界に生起する事柄を熟知し、背後から糸を引く者です。聖書はサタンの存在を明示しますが、軽視&無視する人々が跡を絶ちません。救い自体は全く影響されませんが、信仰生活に影響が無い訳ではありません。罪を犯そうとする背後に影がちらつけば、御名により撃退せねばなりません。御業を代行する信仰者を惑わし妨害し攻撃する。以上を最も激しく受けられ、死に至るまで戦ったのが主イエスで、主の死と復活はサタンの大誤算でした。復活以降、サタンの行動範囲は著しく限定され、最期は火の池にて滅びます。かくて終わりの日には天と地が一つにされて、永遠に主の民の国となります。

だから本書を概観すれば、暫し放たれたサタンの勢力に主が勝利を収めて、聖書全体のストーリーに似ていますが、異なるのはアダムは自ら墮落するも、ヨブは神とサタンとの申し合わせによって、謂われも無い試練を受けました。見方を変えれば主はサタンが義人を攻撃することを、限定つきで容認します。主はヨブに一点も付け入る隙が無いことを自慢するも、サタンは面白くない。「理由もなく」信じるか、純粋な主との信頼関係か御利益信仰に過ぎないかは、彼の祝福を取り上げれば判然とする。つまり本書の構図は「ヨブ対神」でなく、実は「サタン対主&ヨブ」であり、契約関係に風穴を開ける試みだったのです。答は極限まで打たねば出ません。そこで断腸の思いで主はヨブを委ねました。世の宗教は概して御利益信仰ですが、彼らは本書をどう評価するのでしょうか。試練を経て信仰は金ピカになり(1ペテ1:7)、無条件の愛と恵みを痛感します。善行や報いに頼る信仰は陳腐です。ヨブの試練を重ね合わせて慰めを得ます。

1月27日

「裸で礼拝する」

ヨブ記 1:13-22

武安 宏樹 牧師

人災と天災が交互に立て続け四度、世の終わりに地の四隅が崩壊する如く、家族&部下&財産全てが奪われ、ヨブ自身も身ぐるみ剥がされ裸にされます。「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」壮絶な信仰告白です。注目すべきは「与え」だけでなく、「取られる」セットで理解していたことです。

私たちの祈りは「与え給え」「清め給え」「赦し給え」など、足し算的信仰です。そのこと自体は不信仰でも御利益的でもなく、聖書的祈りと言えるでしょう。注意すべきは目的と結果が逆に、御利益が目的にならないようにすることで、主イエスは荒野で「神の子なら…」、父に求めずとも石がパンに変えられて、父に許可を得ずとも飛び降りて無傷に、父に代わり全世界の栄光を手中にと、サタンから父との関係を分断するように誘惑されましたが、全て退けました。ヨブもこのことを熟知して、「主の御名はほむべきかな」と賛美で結んだ中に、彼の高度な神学理解は、主イエスと父の関係に通じると見ることができます。以上「主は与え」に関する霊的戦いについてですが、それだけは片手落ちです。

「主は取られる」ことも、与えることと同様にヨブの神理解ということです。享受している平和や人間関係や教会の祝福が、取り去られることもあります。パウロは肉体の「とげ」が平安の妨げとなることを嫌がり、三度解放を願うも、聞き入れられず、かえって自分の弱さを受容することを学びます(Ⅱコリ 12:)。いやされない、うまくいかない、そんな経験をすると不足&不満を覚えます。状況の打開を期し無謀な努力をします。それは主は与える方であることしか、頭に無いからです。妨げとなる世の富を取り去り給え、己を打ち砕き給えと、祈ったらどうでしょうか。パウロは主にあって弱さを喜ぶ境地に達しました。与えるも取られるも主に委ねると、愛着はあるとしても執着しなくなります。

「与え」&「取られる」プラスもマイナスも、恵みも試練も一括で受け容れる。主イエスは十字架上で王服裂かれ、嘲られ、神の子たる身分捨て、裸にされ、最期はいのちさえ捨てて取り去られました(ピリ 2:6-9)。ヨブの告白に比して、「主は取られ、主は与えられる」が御子の生き様でした。与えられるだけでは、肥え太るだけで信仰は成長しませんが、双方を捉えて恵みを真に悟るのです。

2月3日

「三人の友」

ヨブ記 2:1-13

武安 宏樹 牧師

3～37章の長きに亘り、三人の友(エリファズ&ビルダテ&ツォファル)と、後にエリフとヨブの対論が続いて、本書の8割を割いて冗長とも思えますが、単に2章までと38章以降だけで、神と人との関係に有効召命や堅忍の教理を、結論づけでは足りず、まことに人生は山あり谷あり起伏に富んだものであり、時に極限状態で苦しみ呻き泣き叫ぶ異常さから、神との出会いを経験しつつ、いわば本書全体でカウンセリングを受けるように読むと、何か見えてきます。

本章はサタンが神に食い下がり、体を打たれたら白旗挙げるに相違ないと、譲歩を引き出します。「いのち以外」とは、人の生死の不可侵性を意味します。つまり神が譲歩されたのは、ヨブが離れないとの絶対的な自信の現われです。だから敢えて彼を頭から爪先まで腫物で覆って、廃人同然の苦しみに置いた。ここでサタンは姿を消し、代わりに妻が「神を呪って死になさい。」(9節)と、旧約史上最高の聖家族を共に建て上げた伴侶さえ、苦悶の末に言い放ちます。ヨブを打つても見出されなかった御利益信仰が、妻から暴露されてしまった。伴走車から声援を送り続けた伴侶が、突如としてもう駄目だリタイヤせよと、脱落する衝撃は如何ばかりか。それでも彼は妻を断罪せずにたしなめながら、「わざわざいをも受けるべき」(10節)と「主は与え、主は取られる」以上の告白を、この期に及んで成します。妻の信仰が劣るのではなく、助け手の限界でした。

次に妻に代わり舞台袖から、三友人が道中語りながら中央に歩を進めます。ヨブが大変な目に遭っていると下調べし、祈り、神学的齟齬無いよう調整し、会いに行こうと足を運ぶ。その行動と対論から彼らは断じて愚か者ではなく、塵芥(ゴミ)置場で悪臭に耐えて座り込み黙して涙し、痛みを共有した誠実な友です。彼らの兄弟愛はヨブの求めている神の愛には、結果的に届きませんでした。いずれにしても三友人が愛と知恵を尽して集結したことは、尊敬に価します。以降の対論の盛況から、この7日間はヨブの心を開く上で重要な期間でした。私たちはどうか。痛みに寄り添う友人はいたか、逆に寄り添えたでしょうか。ヨブの妻も友人たちも、人として極限まで寄り添おうとした最高の友でした。主イエスも弟子たちを友と呼ぶも、彼らは大事な時に見棄てた失格者でした。そんな彼らさえ友と呼ぶ主の愛を、私たちも友との関わりから求めましょう。

2月10日

「主の祈り～天の父との愛の交わり」

マタイ 6:9-13

本馬 信義 師

主イエスは、弟子たちに神への祈りを教えられた。「天にいます私たちの父よ」。イエスは、父に愛される御子(マタ 3:17)。天の父は、イエスにより、私たちを罪から贖い、御霊を与え、愛する子とされた(ヨハ 1:12/3:3,5/ロマ 8:15)。イエスは、「祈りなさい」と、天の父との愛の交わりに生きるように私たちを招かれる(ヨハ 15:9-10/ロマ 5:5-8/ I ヨハ 4:9-10)。

主の祈りの前半3つの祈りは、天の父を愛し、天の父ご自身を求める祈り(マタ 4:17/6:33)。
①天の父の聖なる御名の栄光があらわされることを祈り(イザ 6:/57:15)、②天の父の、御子イエスによる、王としてのいのちの支配、御国を祈り(コロ 1:13-14/マタ 24-25:/ロマ 8:/黙 21-22:)。
③天の父の愛の御心が、天でも地でも行われることを祈る(ヨハ 3:16-17/6:39-40/ロマ 8:/マタ 16:24-25/26:42)。

主の祈りの後半3つの祈りは、天の父の愛の配慮に信頼する祈り。④天の父は、愛する子たちに必要な糧を日々与えられる方(マタ 6:/使 14:17/ロマ 8:32)。⑤天の父は、私たちを愛して、御子イエスの贖いのゆえに、私たちの罪を赦される方。私たちも人を赦す愛が与えられ、天の父の赦しの愛の中で生きる恵みが与えられる(マタ 9:2/26:28/エペ 1:7/4:32/ I ヨハ 1:7,9)。⑥天の父は、愛する子たちを、試みにあわせず、悪い者(サタン)より救い出される方(マタ 4:1-11/ルカ 22:32/ I ペテ 5:8-9)。

〔適用〕

天の父に愛される子たちとして、①主の祈りを日々の生活で。教会で。

①神の愛のみことばの黙想。暗唱。祈り。③信教の自由を守る日。

2月17日

「苦悩する者に光が」

ヨブ記 3:20-26

武安 宏樹 牧師

前章で家族&財産&健康を奪われて、なおも信仰を告白するヨブに比して、本章で毒を吐くに至ることに落差を覚えますが、実は両章は密な関係にあり、友人たちが7日間も黙って寄り添ったことで、「そのようなことがあった後」他の誰にも開かなかった重い心の扉を、ヨブ自らノブを回して開いたのです。深い葛藤を吐露する価値ある友と認めた瞬間、ドロドロした不信感や疑問が、嘆き悲しみの感情と共に、口をついて心の内から外へ白日の下に晒されます。ヨブは誰を呪ったのか。非の打ち所なく仕えたのに酷な仕打ちをされた主か。サタンの目論見に反しそうはしませんでした(2:5)。三友人も呪わなかった。ここに極限状態に至って創造主の全能に疑義を挟まない、彼の聖さを見ます。

それでは何を呪ったのか。主御自身ではなく御業を、自分の誕生の瞬間を、闇から光が生まれる創造第一日目と重ね合わせて(創 1:1-5)、呪ったのです。斯くて煩悩を遡れば、主御自身を呪えない代わりに御業を呪うしか無かった。三位一体の神の御業に賛同する御使だけでなく、抵抗勢力は無かったのか。もちろん健常者の精神状態ではありませんが、際限もなく逡巡していました。彼は不思議なことに取り去られることを願いつつ、自殺を願ってはいません。死を選べば地上の苦しみは終わるも、同時に主ご自身との対決も終わります。裸で生まれ裸で還る被造物ゆえ、死さえ神主体でないと納得出来ないのです。激しい言葉を止められず衰える心は、御業の疑問に思いを馳せていたのです。

如何に苦しむとも非情にも朝は訪れる(20～21 節)。預言者エリヤも同様に、二人に共通していたのは死を願う以前に、「何で自分が」との自己憐憫です。イゼベルの恫喝程度でヘソ曲げる不甲斐なさに、こんな駄目人間を選ぶなら、殺してくださいと開き直る。私たちも同様の経験がありはしないでしょうか。学校や職場で絶望的ないじめに遭うと、生きる意味を見出せなくなりますが、まことに人の生と死は宗教的です。主イエスが苦しむ者の罪を背負って死に、復活のいのちに生かされ、御体の一部として神の栄光を現わす新しい人生を、福音理解から初めて見出すのです。その時に鉄条網のような「囲い」(23 節)は、祝福の「垣」(1:10)と悟り、「光は暗黒(くらき)に照(て)る」(ヨハ 1:5 文語訳)と宣言できます。

2月24日

「神に責められる幸い」

ヨブ記 5:17-27

武安 宏樹 牧師

三友人が三巡してヨブと対論する一回目に、教師然としたエリファズ登場。彼らは7日間寄り添い耳を傾けた良い友人ですが、対話は一向にかみ合わず、話せば話すほど溝が出来てしまい、両者の前提に根本的ズレが見えてきます。それはヨブは「理由もなく」(1:9)神を恐れるも、三人はそう見ていなかった。何か罪を犯したので全て取り去られ、神に責められていると決めつけていた。要するに「因果応報」の公式に縛られていました。だから罪を指摘し悔い改め、カインやサウルの如き落伍者への転落から、救われてほしいと本気で考えた。されど罪の意識が無いのに責められることで、心身共に疲弊しているヨブに、追い打ちをかけることになり、皮肉にも三人はサタンの代行をしていました。

エリファズの神学を検証すると、基本的に間違ったことは語っていません。因果応報の概念も、良きも悪しきも裁かれるのが神ゆえそれなりに正しいし、信者は栄え不信者は滅びる摂理、作物の恵み、弱者への慈愛なども同様です。問題は正しい神論をどう適用するか。率直に言えば論文発表会の域を出ずに、ヨブに一線を引いて大上段から延々と起訴状を読み上げ、悦に入る検事です。三人で牢獄に幽閉し罪を吐くまで出させない、弁護士も雇えないと裁きます。一言で言えばヨブに対して神となった。彼らは全くひどい友人だと呆れつつ、私たちも家族&友人に対して同様に追い詰めて、傷つけてきたのではないか。自分を神、信仰を偶像化し、隣人の救いどころか遠ざけていないでしょうか。

「神は傷つけるが、その傷を包み、打ち砕くが、御手でいやしてくださる」も、全くそのとおりですが、彼の論法では前半に断罪的な神学と神秘体験でムチを、後半で悔い改めた暁にアメをと、祝福を除けば神を捨てるサタンの目論見を、反対側から裏書きに過ぎません。ところで悔い改めはいたって聖書的ですが、「もし私たちが自分の罪を告白するなら、その罪を赦し〜」(Iヨハ1:9)の金言と一見同じように見えて決定的に違う点は、主イエスの交わりがあるか否かで、まさに罪なき御子が神に責められた十字架こそ、因果応報の呪いの打破です。私たちキリスト者も同様に、義のために責められる幸いを受けつつ(マテ5:10)、罪にも義にもどんな苦しみにも、弁護者なる主イエスにすがり慰められます。

3月3日

「人とは何者か」

ヨブ記 7:11-21

武安 宏樹 牧師

三友人が三巡してヨブと対論する、第一回エリファズへのヨブの応答です。6～7章を見ると、友人たちに答えるようで神に求めたり叫びに移行したり、ヨブは友人の彼方に神の存在を捜します。その過程で友の攻撃と神の沈黙を、サタンが利用し彼が神を呪うよう努力します。「友情＝変わらぬ愛」(6:14)と、脚注にあります。ヨブは神の愛の不変を求めつつ友の冷淡さを非難します。本章は前章で外側を向いたベクトルが、転じて彼の内面と人間論に向かって、彼は三人と異なり売り言葉に買い言葉でなく、神と自分との関係に立脚して、神に造られた人とは何者か掘り下げます。「何者」とは世の人が「自分探し」に終始して原罪の解決に行き着かず、偶像礼拝と惑わしの霊に翻弄されながら、滅びの道を辿るのに対し、彼は神との関係で自分以前に人の原点を求めます。私たちも「ヨコ」を見る以前に、神の作品として「タテ」を見ることが大事です。

キーワードとして6～7章に4回登場する、原語「ルーアハ」があります。それぞれ「たましい」「風」「息」「霊」と訳されますが、主が共に居られなければ、獣と等しく息するだけで、風のように儚く、霊的空虚さを、ヨブは訴えます。この語は創造における神の霊(創 1:2)、霊的復興預言(エゼ 37:)にも用いられ、そもそも人が生きようになるのは、神が鼻に息を吹き込まれたからですが、まさしく彼はいのちの息吹とリバイバルの風が途絶え、苦しんでいるのです。聖書の人間論をおさらいすると、初めに神は御自分に似た者として人を造り、肉のいのちだけでなく霊的ないのちも備わっていましたが、墮落で毀損して、死の恐怖に怯える者となりましたが、旧約時代にも信仰に歩む者がいました。その一人がヨブであり、主体的に神を愛して御心を求めて公義を行いました。だから神の息吹が断たれたら、窒息して死んだ方がマシと告白します(15 節)。

霊が潰れて肉のいのちだけでは片肺飛行です。「もういやです」(16 節)は、自暴自棄に非ず、神に執着する者の本音です。罪を負わされ放置されるなら、いっそ消えてしまいたい。このような人生を伝道者の書では「空」と称します。ヨブは神が人の心に永遠を求める霊性を備えたことを、理解していました。私たちは自分や周囲の地上的祝福で満足しがちですが、神は人をそのように、造っておられません。「もういやです」「空しい」と神に食ってかかりませんか。

3月10日

「この最後の人にも」

マルコ 1:14-15

入川 達夫 師

私たちクリスチャンが地上に残されている目的は、周りの同胞が一人でも多く神の御国に加えられるためです。私たちはそのため日々労苦しながら福音を宣べ伝えています。そこで主イエス・キリストが福音宣教を開始された「時」と「場」と「福音のことば」を教えられ、主に倣いたい。

I. 主イエスはどのような時に福音宣教を開始されたか？

「ヨハネが捕えられた後」(14 節)と書かれています。これは神のみことばが人間の手によって封じ込まれた時と言えます。それによって神のみことばに公然と反逆し、神を恐れぬ傍若無人な権力者が支配する時代となりました。このような条件の悪い時にイエス様は福音を語られました。福音を宣べ伝えるのに条件が良い時、悪い時は関係ありません。

II. 主イエスはどのような場で福音宣教を開始されたか？

「ガリラヤに行き」(14 節)、ガリラヤで宣教を始めたことは旧約の預言の成就です。「もろもろの霊の支配する暗闇と死の地」(付 9:1-2)において、すなわち偶像の呪縛の中にある地であると言っています。福音は滅びに向かっていて人に語られる必要があります。

III. 主イエスはどのような福音を宣べ伝えられたか？

「神の福音」(神の国の福音)を宣べ伝えられました(14 節)

「悔い改めて福音を信じる」ことを求められました(15 節)

福音は滅びから救うものであり、信じる者に永遠の命を与えるものです。イエスご自身こそが福音なのです。

IV. 今こそ神の国の福音を大胆に宣べ伝えるべき時です

*今年この国は新天皇が大嘗祭により諸々の霊を身に帯びて神の位置に立つ。

*これによってこの国は唯一の生ける神に公然と反逆し、これまでよりさらに霊的闇の深みに増々のめり込んでゆくであろう。

*このような暗闇と死の地に住む同胞のため、私たちの永遠を決定づける神の 唯一無比の救い主イエス・キリストの福音を宣べ伝えてゆこうではないか。

3月17日

「心から笑える日」

ヨブ記 8:20-22

武安 宏樹 牧師

三友人が三巡してヨブと対論する第二回目、二人目ビルダデが登場します。エリファズは論理的な教師タイプですが、ビルダデは結論から話を簡略化し、「あなたが口にすることは激しい風だ。」(2節)と冒頭から斬り捨てます。彼も同じく因果応報の思想に縛られ、上から目線でヨブを断罪する者でした。良く言えば何が言いたいのか明快で、メッセンジャー向きの激励型とも言え、「神は、ついに笑いをあなたの口に〜」(21節)目指すべきゴールを強調します。「哂笑(わらひ)」(文語訳)とは爆笑や嘲笑でなく、内面の充実でニッコリ笑う様ですが、ビルダデの意図はヨブの悔い改めに神が喜ばれ、「ついに」笑うことができる、条件付きに過ぎず、裏を返せば彼自身が目標達成の結果的な喜びしか知らず、要するに主ご自身を喜ぶのではなく、自分の基準で喜べるかが決まる訳です。

私たちは「常に喜べ」(1テサ 5:16 文語)が、キリスト者の標準と知っています。平日はともかく日曜は充実した信仰を送っているかのように、見せたくなる。されど有名な御言葉ゆえ、「喜び&祈り&感謝」が律法的に先走っていないか。表面的&体育会的で焼畑農業の如き信仰生活を続けると、疲弊してしまうか、喜べない祈れない感謝できない人々を叱咤激励か、活路を見出せなくなり、教会は聖日と平日の落差の激しい、偽善者の信徒の集まりに墮するでしょう。以上ビルダデがヨブに試みたのは、友人の善意の皮を被った悪魔的手法です。だからヨブは表面的な喜びでなく、主ご自身の御手が何処かを求めて抵抗し、ありのまま悩み苦しみ友人にもノーと拒絶する。どこまでも謙虚&率直です。神を喜んでいないのではなく、信頼するからこそ妥協せずに喧嘩するのです。

パウロは「キリスト・イエスに由(よ)りて」(1テサ 5:18 文語)以上を条件付けつつ、「御霊を熄(け)すな」(1テサ 5:19 文語)と続けます。主イエスの生き様と御業を見て、救われた者として人格的に沈思&黙想する中に、聖霊の喜びの泉が在ります。捕囚民の帰還を預言する都上りの歌に、心からの喜びが記されます(詩 126:)。ここで注目すべき点は、帰還も歓喜も全ての主権は主ご自身にあることです。ヨブが求めたのはこれで、天上の故郷エルサレムへの帰還の喜びの渴望です。主イエスは十字架により天と地を橋渡しし、聖霊の内住に御国は存在します。今喜べなくても主は離れないのでいつか喜べる、キリスト者は幸いな者です。

3月24日

「仲裁者の必要」

ヨブ記 9:32-35

武安 宏樹 牧師

三友人が三巡して対論する第二回目ビルダデへの返答ですが、前回に比べ、格段に短くなります。神の公正さについては「そのとおり」と受け止めつつも、硬直化した因果応報論に終始する三人には、自らの正当性を法廷に持ち込む、ヨブの神への疑問は悪あがきにしか見えず、両者は依然平行線をたどります。彼が三友人より先を行くのは、神は因果応報の公式に収まらない恵みの神で、律法的でなく霊的な交わりから、謙虚で大胆な信仰が養われてきたことです。かくて神との友情を基盤にして、「何故?」「どうして?」と迫るのは自然ですが、そもそも訴える対象が人間でなく、天の法廷における聖なる神であるがゆえ、どんなに正しくても勝ち目がなく、ならばどうやって生きていけばよいのか、「私には自分からない。」被造物として生きる意味を見失いかけています。

たとえば私たちから聖霊が離れてしまったら、どうなってしまうでしょう。御言葉の光を頼りに生かされていた、足のともしびが消えてしまい(詩 119:)、想像しがたい暗闇となって歩けません。適当に世と折り合いをつける人なら、他からライトを得て違う道を歩むでしょうが、新生&聖化体験に歩む者には、現在地も目的地も見失った末に、奈落の底に突き落とされることでしょう。

それがまさにヨブの心境でした。三友人が気楽に勧める悔い改めや善行さえ、天からの光無くば無意味であり、聖所から締め出されて行き場を失った彼に、必要なのは神と人との破れ口で、モーセのように狭間でとりなす祭司でした。サウルの捧げた適当な犠牲、エレミヤの忌み嫌う便利な祭司では良しとせず、世の何処にも居ない「仲裁者」に、断絶の橋渡しを夢見るしかないヨブでした。

「義人はいない。一人もない。」(マ 3:)とパウロは旧約を引用しましたが、ヨブの如き「義人」でも解決できないのが、アダム伝来の原罪とさばきであり、旧約史上最高の契約関係にあったヨブは、気の毒にも一時解除されるが如く、やがて時が来て真の仲裁者を知る、新約時代の更新を待たねばならなかった。期せずしてヨブ自身が献身と、大祭司キリストを指し示す予型となりました。「われわれは彼の祭司職の仲間」(ジュネグ信仰問答 43)神を知るだけではなく、私たちは人の弱さと限界も知ります。私たちはキリストの御名で祈る時に、天地の狭間でとりなす仲介者となられた、主イエスを知るのです(ヘブ 9:).

3月31日

「きよい生き方」

ヨブ記 11:7-20

武安 宏樹 牧師

三友人が三巡してヨブと対論する三人目ツォファル登場。「三度目の正直」とはならず、前二人同様に因果応報神学の焼き直しでした。それどころか、引用が皆無なのを見るとヨブの話を、「無駄話」「おしゃべり」と聞こうとせず、「不信実」「不法」「無知」「野ろばの子」と、感情的に激しく侮蔑&断罪しました。三友人の年代については記述がありませんが、彼が最も若いと想像できます。年長者より知識&経験が乏しい分、言葉足らずでも単純率直さが持ち味です。「ヨブよいくら御託を並べても、神が出て来られたら貴方(あなた)は一卷の終わりだ!」これが言わんとすることで、信仰に余計な言葉は不要で是か非かの神論です。頼みの綱として期待した友の心ない台詞(せりふ)は、以降ヨブの態度を硬化させます。

青年信仰者の歩みとは正しくきよく、主に喜ばれる一本道を慕進しますが、良くも悪くも言葉と行いが先になる。果して自分の発する言葉が正しいのか、窮地にいる友の建て上げに資するのか、そこまで冷静に計算できないもので、彼の語り口に「私は義人で、あなたは罪人!」と決めつける不遜さが見えます。実は彼の発言は前二人と異なり二回で終わります。言葉が尽きたのでしょう。二回目を見ても論旨に発展が無く、そもそも彼の存在意義とは何だったのか。最終章ではヨブのとりなしで、三人が悔い改めを認められ和解する大団円で、主に促されて互いに手を取り合い慰め合うも、おそらく最年少ツォファルが、最も霊的に感情的に揺さぶられて、自分の罪に心突き刺されたのではないか。

若い魂は神の愛と悔い改めを迫る明確なメッセージで、受洗&献身決心に導かれます。涙流し肩震わせ頭垂れ抱きかかえられる若者に希望があります。自分の発した言葉がブーメランの如く返ってきて、胸に刺さります(7-9 節)。いったい神の何を知っていたか。何も知らず、知ったかぶりに過ぎなかった。されど三友人の末席に選ばれ、砕かれ悔い改めの恵みに与る光栄なことです。同情を表さぬ彼は未だ神の愛を知らなかった。「広さ&長さ&高さ&深さ」が、どれほどかは神の愛に根差して初めて知ると、パウロは言います(エペ 3:18)。私たちもそうではないでしょうか。信じたての威勢良い時は未だ愛を知らず、罪を犯して人を傷つけて赦しを知る。きよい生き方は愛を知ることからです。

4月7日

「人のはかなさ」

ヨブ記 14:1-22

武安 宏樹 牧師

三友人の対論が一巡。ツォファルだけでなく三人に対してヨブが答えます。12～14章の三章分の長きにわたり、前半は三人、後半は神への問いかけです。三人は共通して因果応報の神学で断罪しつつ、神のボディガードをしながら、栄光を笠に着る「神々」として、苦しむヨブにサタンの如く鞭打っていました。人間は有限ゆえに、無限の神の理解に近づくために、神学の営みはあります。けれども神学が神になって偶像と化していないか、吟味されるべきでしょう。サタンは自分の力を栄光化させ、人が神と隣人を愛する努力から遠ざけます。ところがヨブは神学的方法論で満足せず、神との交わりだけに答を求めます。「彼われを殺すとも我は彼に依頼(よりのたの)まん」(13:15)もはや己が生きていくためでなく、死んでも神と交わりを求めると告白します。ヨブは罪を犯したことがないと、言うのではなく、度重なる悔い改めと赦しから支えられた確信があるのです。

前半の強烈な確信と希求と打って変わり、後半は一気に弱々しくなります。死ぬのが恐いのか。いや神との交わりがリアル過ぎて生きるのが恐いのです。以前は恵みの雨の交わりが、洪水のごとく押し流さんとし重たすぎるのです。「彼われ殺すとも」も本音なら、そんな追い詰めないでと弱音を吐くのも本音。蕩々と強い自己主張をしたと思えば、シュンとして我が身の小ささを恥じる。それは七日間の沈黙が限界の三友人でなく、全能の神に対して出来たのです。神にぶち当たって受け止められ人のはかなさを知る。人偏に夢と書きますが、「老人は夢を見、青年は幻を見る」(エ 2:28)前向きなビジョンを連想しますが、夢の語源は「ぼんやりとした」意で、「儚」は「よく分かっていない人」の意です。友人に笑われ神に引き回され、ヨブは自分の漠としたはかなさを痛感します。「人は死ぬと、また生きるでしょうか」(14節)己の基盤も分からなくなる中で、「私の代わりがやって来るまで」漠然と来るべきキリストを待ち望みながら、やがて自分以外の罪も負わされて苦しむ特権を、知るに至りました(伊^サ 53:1)。

ヨブは人だから分らず、キリストは神だから分かる苦難の系譜があります。自分だけが良ければと考える人は多いですが、人より余計(＝余恵)に苦しみ、はかなさを知り恵みに目が開かれ祝福をもたらす、学徒でありたいものです。

4月14日

「御口の息によって」

ヨブ記 15:17-35

武安 宏樹 牧師

三友人の対論も二巡目に入り、再びトップバッターのエリファズ登場です。一巡目は先頭打者ならではの丁寧な入り方で、言葉を選び斬り込みましたが、歩み寄りが見られず、「あなたがたはみな、能なしの医者だ」と喝破されては、二巡目以降はヨブは失望、三人は焦燥の色が増し、俄然ヒートアップします。もう一つの変化は、一巡目は三人が優位でしたが、二巡目は形勢が逆転して、次第にヨブの雄弁に彼らが手詰まりとなります。私たちはカウンセリングで、思うように進まない、罪や心の傷や悪霊などのマイナス分析で追い詰めて、修復不能な傷を来談者に与えてしまう悪循環があり、この対論も同様です。エリファズが許しがたかったのは、年下から顔に泥を塗られたこと(12:12)、天地創造に神と共に参画し世の全てを知るかの如く、御業を語ったことです。

実際はヨブはそこまで語っておらず、旧約の史実を語り継いだけですが、神の代行者然とする彼を、悪霊に取り憑かれた傲慢と反逆の君とでっちあげ、「こちらは神の陣営、あちらは悪の陣営」と一線引いて守る防衛本能を三人に、垣間見ます。ヨブは批判はしても、言うべきではない断罪はしませんでした。ここに彼の信仰の底力、どんな時も神と交わり愛を受ける関係性を見ます。論調が三人は暗く、ヨブは苦しみつつも光明が感じられるのは愛の有無です。神との関係が暗ければ必然的に人との関係も暗くなり、人を攻撃するので、根本的に違うのは、自分の意見が「絶対的に正しい」か「相対的に正しい」かで、三人は神と一線画したゆえに、自分たちの論調の正しさに拘泥せざるを得ず、ヨブは神との交わりゆえに、自分の正しさは神が証される確信がありました。

「主は人の霊の値打ちを測られる」(箴 16:2)の「霊」は「むなしい(=風)」(2節)「息」(30節)と同じ語。ヨブの言葉はエリファズには喧しい風にしか聞こえず、そんなものは神の息吹で一蹴されと考えますが、ヨブはそうは考えないで、天の窓から神の息吹により重苦しい雰囲気は換気され、助けられて語ります。この息吹は双方に白黒つけるのではなく、破れ口でつなぎ合わせる御霊です。復活の主イエスは弟子団の真中に立ち、「聖霊をうけよ」(ヨハ 20:22)と言われ、息を吹きかけられました。御霊は神と人だけでなく、人と人をリンクします。「義に過るなかれ」(伝 7:)一歩引いた知恵で、関係を活かす者となりましょう。

4月21日

「私の保証人」

ヨブ記 16:19-22

武安 宏樹 牧師

三友人の対論も二巡目に辛辣さは増し、ヨブの戦いも激しさを増します。混迷を深めるばかりかと言えば、出口が見えないようでおぼろに見えている。闇雲に主との契約関係にしがみつくのではない、不思議な展開が見られます。「仲裁者」(9:33)&「保証人」(16:19)&「贖う方」(19:25)は同じ原語が使われ、「居たらよいのに…」⇒「とりなしてくれたら…」⇒「ついにこの目で見る！」苦闘しつつも期待が具体的に発展し、次第にヨブは雄弁さを増していきます。かつて父と子が手を握り合った理想的な歩みは、父自ら手を離したことから、迷子に陥りました。彼が求めていたのは、味方もせず正論を吐く友でなく、うろたえる苦しみを受け止め、手をつないで父のもとに連れて行く人でした。

握った手が解かれたのはヨブには災難ですが、神の目にはどうでしょうか。表向きはサタンの要求の容認でしたが、背後では積極的な目的がありました。一言で言えば「脱・優等生(エリート)」です。優等生は出来ない人の気持ちが分からない。ヨブとしては祝福を独占どころか、一人でも多く与えようとしていましたが、三友人はじめ他の人々から見れば、ジェラシーやコンプレックスの的でした。完全無欠の選手がケガで二軍生活を余儀なくされ、裏方のありがたみを知る。かつて先頭で引っ張っていたのが、しんがりで声をあげてまとめる器となる。神は優等生集団ではなく、罪の暗闇の中で生まれつき苦しむ者をも取り込み、底辺の広いチーム編成を志すために、あえてヨブに泥をかぶらせたのでした。

とはいえヨブは救いを暗示はしましたが、贖いも完成も彼には出来ません。しかしキリストは、罪と死の恐怖と悪魔の鎖に縛られた人々を解放するため、憐れみ深い忠実な大祭司となるために、ご自身で罪を贖われました(ヘブ 2:)。 「義人ヨブ」と異次元の、全き聖さと永遠性を持たれたイエスキリストだけが、天の父から遣わされることで、神でありながら人である完全な保証人となり、離された神の手と人の手を結び合わせます。使徒ペテロは自ら手を振り解き、自分を責め傷ついていましたが、主イエスは失格者を見放さず来られました。そこに神の愛があります。ヨブさえ出会えなかった方が、今や臨在されます。キリストのとりなしで大胆に神に近づき、人に近づこうではありませんか。

4月28日

「人とは何者なのでしょう」

詩編 8:1-9

三谷 義也 師

夜空を見上げたことがありますか。最後にいつ夜空を眺めましたか。そこに何が見えたでしょうか。そこに何をみましたか。ダビデも外に出て、夜空を見上げます。その光景に圧倒されたダビデの口から、賛美のことばがあふれ出てきます。

神さまをほめたたえたその時、ダビデは自分という存在を見つめざるを得ませんでした。権力も、力も、富も、一切の虚飾を脱ぎ捨て一人神さまの前に立って自分自身と向き合ったのです。でも、その時そこに見えたのは、絶望でも、惨めさでもありませんでした。神さまがこんな自分のことをも、心に留めていてくださる。こんな自分のことをも、顧みてくださっている。神さまの前に生かされているのです。全能者の前の惨めな姿ではなく、全能者の愛の中に生かされている姿でした。

実はここで使われている「人の子」という表現は、イエスさまがご自身のことを語る時にしばしば使われました。この言葉に私たち人間の姿を見るのと同時に、ご自身を卑しくして歩まれたイエスさまの姿とが重なります。

私たちは自分の本当の姿を見ることを恐れます。でも自分と向き合うこと無しに神さまと出会うことはありません。また、神さまと出会い、神さまと向き合っていた時に、自分自身の姿も見えてきます。でも、その時こそ、神さまの前に自分がどんな存在なのか、見させていただける時なのです。

自分の本当の姿を見えていますか。自分自身と向き合っているでしょうか。

時に自分よりも遙かに大きな存在に出会い、自分の身を委ねてみることも大切なのかも知れません。たまには外に出て夜空をじっと見つめてみるのも良いのかも知れません。そこに何が見えるのでしょうか。そこに何を見ますか。

5月5日

「悟りとは何か」

ヨブ記 18:1-4

武安 宏樹 牧師

三友人の対論も二巡目で二人目ビルダデ再登板。進展のない話に見かねて、「いつになったら、けりをつけるのか」(2 節)と眉つり上げ、苛立ちを表します。とはいえ彼の話も因果応報の焼き直しで、ヨブの内面を汲まず一方的に語り、「まず悟れ！」そうでなければ議論など無意味だと、上から目線で一蹴します。

「悟りを開く」とは、仏教では清浄行で人間の欲望&執着の汚れから解放し、そうして煩悩や我執を克服した暁には、「空」の境地が得られると言われます。よって仏教は無神論で自己浄化なので、浄められても救いが漠としています。キリスト教は有神論で個人的救いから、聖化も神に喜ばれる業も始まります。キリストと二人三脚で聖められながら、天の父が待つゴールを目指して走る。だから救われたら誰でも悟りが始まります。されど三友人が口を揃えるのは、ヨブは悟りの不在ゆえに、神に反抗的な態度を取っていると断罪しています。

だから聖書的には「悟りを開く」とは神を知ることと同義ですが、一言で神を知ると言っても奥行きがあり、入信～召天の全ての行程を指しています。聖化は恵みの業ですから、極論すれば善行せずに寝ていても救われますが、それでは主を深く知ることが出来ません。逆に仏教の修行のように励んだら、悟りを得るのでしょうか。実際に三友人はパリサイ人のように励んだことで、彼らなりに因果応報で神を恐れながら、煩悩から解放されたかも知れません。原語は「悟る＝理解する」以外にも、「読み取る」「思い巡らす」「聞き取る」など、能動的な意味があり、悟りとは神との関係から地道に与えられると判ります。「みことばの戸が開くと光が差し、浅はかな者に悟りを与えます」(詩 119:130)

主の教えを喜びとし昼も夜も口ずさむ者が、時が来ると実を結ぶ信仰こそ、悟りではないでしょうか。未だ実を結んでおらずヨブの如く苦しんでいても、主を呼び求めているのだから悟っています。もちろん完全ではありません。地上の人の悟りは途上にあります。「おまえの高ぶる波はここでとどまれ」と、主を尋ね求めるあまり一線を越えようとしたヨブを、神は制します(38:11)。禅修行僧が中途半端な悟りにより、自我が肥大することを魔境と言いますが、神との関係は悟りで神同然になるのではなく、一線をわきまえ近づくものです。

5月12日

「主イエスの真の家族」

マルコ 3:21, 31-36

入川 達夫 師

今日は「母の日」である。主イエスの望んでおられる真の家族の姿についてみことばに聞こう。

I. 神のみこころに逆行したイエスの家族

- a) イエスのよからぬ噂を気にしてイエスを連れ戻しに来た家族
- b) 神のことより自分のことを優先している肉の性質に基づいている。
- c) 彼らのしていることは神のみこころに反する行動である。

II. 神のみこころにかなう主イエスの真の家族

- a) 主イエスの家族はイエスを救い主と信じる者たちによって構成される。
- b) この家族は主イエスのもとに集められた愛の共同体である。
- c) この家族は神のみことばを聞いて従うことを第一とする者たちである。

III. 主イエスの望んでおられる真の家族が地上に満ち溢れるために

- a) 主イエスは神のみこころにかなう真の愛の家族が全世界に満ちあふれることを望んでおられる。
- b) そのために主イエスの福音を宣べ伝え、多くの人々が主イエスの家族に加えられるよう祈ろう。

5月19日

「贖い主は生きている」

ヨブ記 19:25-27

武安 宏樹 牧師

三友人の対論二巡目で二人目ビルダデに対する返答です。「仲裁者」(9:33)⇒「保証人」(16:19)と深められてきたヨブの確信は、「贖う方」へ昇華します。天上で腕を組んで放任でなく、地上で苦しむヨブへ下りて来られる方として、対する三人の冷たい因果応報神学の背後で、神を遠ざけ挫けさせるサタンと、対峙します。実際ヨブは距離感を感じ(13～20 節)、策略は奏功と見えますが、彼は誰も自分を助けようとしないうち、神の御手の中にあると気づきます。神は世から隔離して苦しませつつ、排他的に御自身に向かわせているのです。このことは私たちの祈りの価値観を根本から変えます。理解者や答が来ずに、試練で孤軍奮闘する目的は、人の助けに非ず神に依り頼ませるためなのです。それは人に相談したり理解を求めることが、無益というわけではありませんが、神に追いやられて、「苦難⇒忍耐⇒練達⇒希望」(マ 5:3-4)を見る信仰こそが、キリスト者に相応しいのです。ヨブも未だ見ぬ贖い主への希望を告白します。

苦難で神に近づけられながら、「私を贖う方」「私自身の目がこの方を見る」宣言を聞く三人は屈辱です。ツォファルは「糞」も「毒」も喰って死ねと罵倒し、サタンは背後で焦ります。それは「ちり」の表現で地上だけでなく地下世界も、股にかけて贖い主が権威を及ぼすことで、かりにヨブが衰え死んだとしても、主を信じる者は死後の陰(よ)府(み)に至っても、贖い主に見えると宣言したからです。まさに来るべき救いの前兆予告で、死の力も糞喰らえとサタンに中指立てた。この告白が折り返し地点となり、三巡目にかけて明らかに彼は息を吹き返し、三人はトーンダウン、サタンはじり貧です。何と生々しい霊的戦いでしょう！「苦難・苦悩・迫害・飢え・裸・危険・剣」さえ、主の愛から引き離すことは出来ず、「これらすべてにおいても、私たちは圧倒的な勝利者となるのです。」(マ 8:37)

「なぜ『陰府にくだり』と続くのですか？」(ハイデルベルク信仰問答第 44)

「それは、わたしが最も激しい試みの時にも、次のように確信するためです。すなわち、わたしの主キリストは、十字架とそこに至るまで、御自身もまたその魂において忍ばれてきた言い難い不安と苦痛と恐れとによって、地獄のような不安と痛みからわたしを解放してくださったのだ、と。」

5月26日

「感情的な応答」

ヨブ記 20:1-3

武安 宏樹 牧師

三友人の対論二巡以上に当てはめると三友人の苛立ちは、攻撃でなく反撃ということになり、彼らなりの規範への違反と、再三の説得により期待された改心の不調により、かりに恐れや罪悪感を抱けば許し合えるのに、態度は硬化の一途を辿ります。象徴的なのはツォファルは怒りが「自分」に根差していると、認めている点で、自分の義が神の義より上位となって、非難しながら自分を見失っていきます。私たちはどうでしょうか。夫婦&親子&友人関係に怒り爆発も時にあります。しっかりした価値観&神学を持つのが大事な一方、柔軟性も問われてきます。目で三人目ツォファル再登板。一番若いからか感情的で、今回で言葉が尽きたのか三巡目は不参加。これが最後の対論となった割には、因果応報から一步も出ず、さらに感情は高ぶり怒気を帯び口汚く罵倒します。怒り自体は与えられた感情の一つですから、押し殺すべきではありませんが、どんな心で何の目的かが大事で、心理学的&聖書的に考察していきましょう。

「怒りの現象学的心理学」(山根一郎教授/相山女学園大)の論文を紐解くと、怒りの起源は「なわばり防衛行動」、自分の何かが踏みにじられた衝撃である。「何か」とは個人的&社会的規範(ルール)であり、違反による「許せないこと」の発生が、要件となるため、ある意味でこれは常に「正義の怒り」とならざるを得ない。その程度によって、「①ムカつく⇒②頭に来る⇒③キレル」ついには噴火する。下位感情として、①苛立ち/②癩癪/③不貞腐れ/④憎しみ/⑤嫉妬/⑥叱責が、対立感情として、①恐れ(反対)/②罪悪感(矛盾)/③許し(無化)が挙げられます。

以上に当てはめると三友人の苛立ちは、攻撃でなく反撃ということになり、彼らなりの規範への違反と、再三の説得により期待された改心の不調により、かりに恐れや罪悪感を抱けば許し合えるのに、態度は硬化の一途を辿ります。象徴的なのはツォファルは怒りが「自分」に根差していると、認めている点で、自分の義が神の義より上位となって、非難しながら自分を見失っていきます。私たちはどうでしょうか。夫婦&親子&友人関係に怒り爆発も時にあります。しっかりした価値観&神学を持つのが大事な一方、柔軟性も問われてきます。

世の心理学では扱いませんが、人間の知情意の奥には霊の座が存在します。信者は悔い改めてキリストをお迎えしたことで、そこに聖霊が座っています。ただし肉の思いが先走ると聖霊を脇に追いやって、自我が座ってしまいます。三友人はここに自分の神学や感情を座らせ、罪を犯し霊性が硬化したのです。しかし神の怒りは愛による矯正が目的です。主イエスは弟子たちを怒りつつ、罪人への神の怒りを身代りに受け切りました。人の怒りとはいかに卑しいか。私たちは怒る前に自らの霊性に、愛の主の十字架と謙遜を覚えたいものです。

6月2日

「不法な計略」

ヨブ記 21:27-34

武安 宏樹 牧師

三友人の対論二巡目最後の返答です。ヨブは贖い主の確信以降(19:25-27)、パワーアップしたようで、背後に働くサタンに本格的に反撃体制に入ります。第一段階として傾聴を求めます(2節)。神に問えば頑迷、友人に反論すれば、侮辱だと牙を剥くより先に、話をよく聞いて心の奥にある痛みを見てほしい。神の御声をじっくり聞く人は、人の声にも耳を傾ける謙遜が備わっています。「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」(Iコリ 8:1)三人は知識はありますが 自分の名誉のために蓄積した末、神の愛で溶かされずに硬くなっていました。

第二段階として因果応報の限界と矛盾を正します。なぜ悪者は悪行を重ね、なおも栄えているのか。彼らを尻目に自分たち善人は報いられて勝利すると、地上的&可視的な価値観で分けずれば、ヨブは非難されて当然の帰結です。そもそも不遇なら罪を犯したから、祝福なら信仰ゆえと考える根拠はどこか。そんな公式で森羅万象説明できるなど迷信であり、偶像礼拝に等しい訳です。現在進行形の試練の中で恵みを給う主こそ、素晴らしいとヨブは知っています。悪霊憑きの息子をつれた父親は、弟子たちの不信仰と律法学者の冷笑の中で、「われ信ず、信仰なき我を助け給え」(マコ 9:24)信仰によりのろくに勝利します。私たちは「お前は駄目だ」という、サタンの惑わしを鵜呑みにしていませんか。主イエスは十字架で全人類の罪を身代りに死なれ、私たちも共に死にました。何に死んだのか。それは因果応報から自分と世の全てを語る高慢ではないか。主は隣の重罪人に、人生の土壇場で行先変更&逆転勝利を語ります(ルカ 23:43)。

第三段階として、善意と友情を隠れ蓑に三人の心に働く意図を看破します。彼らが耳を傾けないのも因果応報で神の恵みへの盲目も、サタンの計画です。まさに「不信実」=不信仰の実であり、彼らの生き方自体空しいと喝破します。「空」は伝道者の書の鍵語で、世で勞苦し知識や財を得ても風を追うに等しい。それは神が人に永遠を思ふ心を与え、御業の全容を見極められないからです。ヨブは地上のみならず天界&地下の三層に神はおられ、御手に守られながら、愛されていると確信するゆえに、この世で完結した生き方を「空」と断じます。神が全てさばかれる。信仰と聖霊の示しで、私たちは因果の鎖を打破します。

6月9日

「聖霊主導」

使徒 8:26-40

武安 宏樹 牧師

「我より聞きし父の約束を待て」(1:4)屋上の中で弟子たち 120 名が待望すると、聖霊は降りリバイバルの炎は燎原の如く拡大し、初代教会は急激に成長して、使徒だけでは対内的な必要が追いつかず、執事が7名任命されました(6:)。ステパノは最初の殉教者となり(7:)、ピリポもペテロと宣教を繰り広げます。建前上はユダヤ&サマリヤでの宣教に留まり、異邦人伝道は未着手でしたが、そもそも聖霊の目的地は「地の果て」(1:8)ゆえ、過渡期の段階にありました。この時期に水面下で聖霊が導いた最初の異邦人が、エチオピアの高官でした。彼がユダヤ人の神に礼拝を捧げるのは、旧約史の移動や離散による拡がり、思えば不思議ではありませんが、自国で公然と信仰の告白は不可能でしょう。彼の求道心が群を抜いていたのは、イザヤ書から道備えがなされたことです。

聖霊は天地創造の前から救う者を選ばれ、時至って回心させます(エペ 1:)。だから彼は救いに選ばれて、そこに聖霊が御使いを通してピリポを遣わした。ここで注目すべきは聖霊が段階を踏ませつつ、二人を近づけていることです。第一段階として「南へ行け」の御声に従い、第二段階として旅団に出くわして、第三段階として「同行せよ」と示されて、第四段階としてイザヤ書朗読を聞き、「分かりますか？」と声をかけた。せっかく読んでも勘所が掴めないと察した。第五段階としてキリスト受難を示す箇所と知り、不思議な聖霊の導きを覚え、第六段階として高官が「どうか教えてください」と、なりふり構わず求めます。恥じたり誤魔化したりしない、彼の純粹かつ謙虚な姿勢は信仰者の手本です。第七段階としてピリポは未だ公開されぬ間に、異邦人に語る使命を覚えつつ、救い主の全体像を余すところなく語り、第八段階として水場にて授洗します。授けてと言われたら断れますが、「妨げ」があると言えば虚偽になりますから、絶妙な要求です。ここに異邦人信者誕生。第九段階としてピリポは消えます。

以上の場面と会話のうちに聖霊が導き人が応じ、道が開かれると知ります。私たちの信仰も同様です。自分がどう動くかでなく、聖霊がどう働かれるかを察知しながら、私たちは悔い改めたり価値観を修正しながら応答するのです。そのために祈り、常に歩き回って語るところに、私たちも御霊が働かれます。

6月16日

「豊かな実が結ばれるため」

ヨハネ 15:1-9

佐藤 賢祐 師

年に何回か浜名湖バイブルキャンプが行われますが、この浜名湖バイブルキャンプの目的はイエス様の恵みにあずかる事、そして浜名湖バイブルキャンプに関わる全ての教会が祝福される事にあります。

今日、学ぶ 15 章は 13 章から続く場面になります。イエス様が十字架の上で自分の使命を全うするにあたり弟子たちひとりひとりと語られている状況が 13 章から書かれています。イエス様は権威の元に自分を低くして仕えました。すなわち、徹頭徹尾、神と人ともに仕える王として、この地上を歩まれました。そのイエス様から目を離さないで歩むことが信仰の上で大切な事になります。聖書に共通して書かれている事は主を求めていく時、主はその人を報われ、神様に反逆する者は祝福にあずかる事はできないという事です。

15 章の冒頭で「わたしはまことのぶどうの木です」と語られました。ぶどうはイスラエルを強調する果物でした。当時、神様の教えを語っていたパリサイ人、律法学者といった人たちは自己中心的な教えを語っていました。それ故、イエス様はご自分をまことのぶどうの木と言っているわけです。ぶどうの木は、よく整備された土壌と、手間をかけてしっかり育てる農夫がいなければ決して甘くて美味しい実を結ぶことはありません。4 節～9 節の間に「留まる」という言葉が 10 回記されています。留まるということばは滞在するという意味があります。日々の歩みの中にイエス様がおられることです。農夫である神様が実、すなわち御霊の実（ガラテヤ 5 章 22～23 節）を結ばせて下さいます。主の御手の中で成長させられた者は、実を結ぶ歩みに導かれていくわけです。

ぶどうの木の結論はゆたかな実が結ばれるために主に愛されている者として互いに愛し合うということです。

6月23日

「平安を得よ」

ヨブ記 22:21-30

武安 宏樹 牧師

三友人の対論三巡目に入りエリファズの返答です。もはやここまで来ると、ヨブを救うとかではなく、己の神学の証明のために粗探しに躍起となります。個人的に訴えることが難しいと見るや、社会悪を責任転嫁する始末(6-9 節)。年長者ゆえプライド高く、ヨブに罪を認めさせないと立つ瀬が無くなります。「神の国と神の義」に非ず、「神学の国と自分の義」を追求するエリファズです。

「人は神の役に立てるだろうか」(2 節)に彼の信仰と神観が表されています。神は創造はしても統治せず、あとは因果応報や輪廻転生の如き法則に則って、善に幸いを悪に罰を与えるだけで無関心を貫く、いわゆる理神論の思想です。仏教的に言えば諦念ですが、ヨブの空騒ぎは悟りを得ていないからとなる。神との交わりなど成立せず、因果応報の法則内で最善を尽くすしか道が無い。正しい行いで神の役に立つなどおこがましい、せいぜい自分の益にすぎない。そんな非常に冷めた信仰ですが、私たちは彼の神観を一笑に付せるだろうか。人一倍努力をして役に立つことでは、信仰者の拠り所を見出せないならば、大罪を犯したり不具者になればオシマイです。役に立っても立たなくても、受け入れられている確信があれば、試練の中でもヨブのように立てるのです。

「和らぐ」(21 節)と「役に立つ」は同じ語で、「自分を役に立つようにさせる」、つまり不平不満を悔い改め親しくすれば、平安が与えられると言うのですが、逆に言えば幸いを取り戻すために、関係回復で平安を得よと御利益を目的に、本末転倒の悔い改めを感わします。エリファズの神観は労使関係のようです。働けなければ無給となり、役に立たなければ切られ、争議行為でクビになる。彼の平安とは自助努力によって、人為的で相対的に維持されているに過ぎず、哀れなヨブに自分のことだけ心配し、悪人の平和など放っておけと言います。けれどもヨブは契約関係の中で保証人の存在も確信し、絶対的平安を疑わず、だからこそ苦しみながらも、神に対して堂々と不満と疑問をぶつけたのです。「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし」(伊⁵³ 53:5)人に理解されずとも、ヨブの絶対的平安は来るべきキリストによる平安を、指し示していました。世の相対的&状況的&感情的平安とは異なると、主は言われます(ヨハ 14:27)。

6月30日

「争議行為」

ヨブ記 23:1-7

武安 宏樹 牧師

三友人の対論三巡目のエリファズに対する返答です。「私の嘆きは激しく」二巡目のヨブのパワーアップは何処へ、振り出しに戻り沈んだ感じがしますが、実際は天の証人に励まされつつ、掴みきれぬもどかしさが駆り立てています。「どこで」(3節)「どうしたら」(共同訳)「何処にか」(文語)神に会えるだろうか。「訴えたい」(4節)は、他の箇所では「責める」(5:17/6:26)とも訳されていますが、自分の正しさを立証するために論じ合いたい。これは三友人は理解不能です。しかしヨブは弁護士に付き添われながら、二人三脚で神の沈黙を責めます。三友人にしてみれば神と人との関係は、「嫌だったらクビ」の労使関係ですが、ヨブは神と人との契約関係から、代行者として栄光を現わす務めを重んじて、引き下がっては契約不履行だと、神はさばかない方だと信じて追い詰めます。

私たちはヨブの如く神と論じ合う覇気はあるでしょうか。罪を犯さないで、神に叱られず、為すべきことを為せばそれで良しと考えていないでしょうか。神との格闘といえばヤコブでしょう(創 32:)。彼は要領よく生きてきました。しかしその代償として因縁の兄が待ち構え、恐れから策を練り一人残ります。自分の知恵で生きる限界を覚え神の前に出て、裸になって砕かれたかった。そこで神は御使いとの格闘を備えて、戦闘不能になるまで夜通し戦いました。「負けるが勝ち」陳腐な表現ではなく、玉砕覚悟で戦いの彼方を渴望しました。恐れや罪意識と戦い自我と向き合い、そして敗北の結果、彼は新生しました。「死んだ者は、罪から解放されている」(ロマ 6:7)身の安全と現状維持を願っては神に出会うことはできず、生と死を賭けなければキリスト者とは言えません。

、「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マタ 16:24)ヨブもヤコブも自分を捨てて、自己中心で不十分でも裸になって神と戦った。格闘と言っても単なる喧嘩腰ではなく、御言葉通り粛々と息子に手をかけたアブラハムも、洞穴で王と遭遇の絶好機に部下の勧めを拒み王に手をかけず、御手に委ねたダビデも、滅びるなら本望と腹を括り神の土俵に上がりました。このような祈りにおける格闘無しには、御手の深さを解せず一皮剥けません。ヨブは神が小さき者を省みさばきを免除すると期待し、テーブルにつきます。臆することなく神と人に関わることで、ヨブは三友人のタブーを打破します。

7月7日

「神の目には」

ヨブ記 25:1-6

武安 宏樹 牧師

三友人の最後に二番手ビルダデ登場(三番手ツォファル:前回でリタイヤ)。最後くらい熱弁かと思いきや、序論も結びもなく本論たった6節分のみで、これは彼だけでなく、最後まで因果応報一点ばりの三人に共通した結論です。彼らの霊性を私たちは笑えるでしょうか。よく考えると笑えないと思います。彼らに難解でヨブには単純な「神との恵みの交わり」は、信仰生活の要諦(ツボ)です。

「主権」は「支配」(共同訳)とも訳され、「軍勢」は太陽&月&星「日月星(じつげつせい)辰(しん)」です。占星術を意識したか全ての光の源は神にありと、ビルダデは正論を語ります。一巡目冒頭にヨブは誕生日をのろい、遡って光を闇に水陸を茫漠に逆回転し、これらを拝むどころか光も届かぬ我に、天地創造の主よ現れ給えと叫びます。光と闇の断層(ギヤツブ)を体験した苦難の僕に、地上レベルで「正しく清く」お説教では、空気の読めず全くのすれ違いです。3～6節は「天⇒地⇒天⇒地」の構造から、天(=神)の高さと地(=人)の低さを対比。最後まで断層(ギヤツブ)の傷口に塩を塗ります。

この断層(ギヤツブ)に対する両者の理解の違いが、因果応報と契約関係の違いとなり、議論を重ねても平行線を辿った要因です。三人は「天か地か」の二者択一で、神と人との間に断層が存在し、天から降った律法を地上で正しく行うことで、天に属する人になるよう努力しますが、そこには救いの確信は存在しません。代わりに優秀な者がそうでない者をさばき、上から目線の神々になりたがる。彼らの神学は単調な理解に終始し、多面的な掘り下げと体験が欠如しました。彼らは「正しく清く」あり得ない罪人ながら、それを求める矛盾に陥りました。

けれどもヨブは「天か地か」ではなく、契約は天地の架け橋と理解しました。体験的な救いの確信により、天地の結び目に自分が置かれていると確信して、だから天の栄光が突如消え、暗闇に放り出された孤児(みなしご)の苦悩に苛まれました。上から目線のはずの三友人最後の一言は、非常に絶望的な響きで(5～6節)、「うじ虫」「虫けら」神の前に無価値で、生ける屍を腐敗させる者と自称します。認罪は大事ですが、悔い改めによる救いの確信は罪人を奴隷から解放します。天地の破れ口に主イエスは立ち(ヘブ 2:)、キリスト者の内に光が存在します。

7月14日

「その目でよく見よ」

申命記 3:23-29

蓮井 康人 師

40年間の荒野の試練を終えて、120歳になったモーセは、約束の地カナンに入ることを心待ちにしていました。それはこれまでの苦勞全て忘れることができるほどのことでしょう。モーセは主に懇願しました。「私の人生の目標は、約束の地に入ることでした。どうかヨルダン川を渡らせて下さい」。残念ながらモーセの願いは神に拒否されました。

誰もが、ピスガに立つモーセの姿に涙するのではないのでしょうか。それは人の情としては当然のことです。ピスガの頂に立つ者の誰もが感じる、言葉にならない思いです。

しかしながら、主なる神が「ピスガに登れ」と言われ、モーセが、その眼を最後まで約束の地に向け続けていたということが、私達に何かを告げているのではないのでしょうか。

モーセが最も大切にしていたのは何であったでしょう。最も強く求め続けて来たことは何であったのでしょうか。ヨルダン川を渡り、約束の地を自分の足で踏みしめたいというのは、大事業を始めた者として当然の願いであったでしょう。しかし、信仰に生きる人間の真実の願いは、自分に対して語られた神の御言葉の正しさの確認であり、自分の歩みが間違っていなかったことの保証ではないのでしょうか。その信仰の正しさが確かめられれば、自分自身がカナンの地に入るか否かは問題ではありません。私は間違ったものを見つめて来たのではなかった。私が求め続けてきたものは、何よりも価値あるものであった。私に語りかけ給うた方は、間違いなく神であった。モーセは、これを確かなものとして見極めたのです。それゆえにモーセは、生涯の最期に立ったピスガの頂において、自分の夢が、目覚めと共に消えるようなものではないことを確認して喜びに燃え上がったのです。

7月21日

「みわぎの内側」

ヨブ記 26:1-14

武安 宏樹 牧師

三友人最後の登場となったビルダデに対する、やはり最後の応答ですが、26～31章の長きに亘ってヨブの独演会で、本章は創造と摂理から陰府～天へ霊界の宇宙的構造や神の知恵について、交響曲第一楽章の如く幕を開けます。「無力」「知恵のない者」と散々けなしながら、三人は因果応報神学の破綻から、勸善懲悪は原罪の問題に全く対処出来ず、彼らこそ無力なことを露呈します。「だれの息(=霊)があなたから出たのか」(4節)スピリチュアルを装いたがる、三人の浅い霊性は肩書や体験を貼り付ければ、偉くなった錯覚を覚えますが、ヨブは遠回しに無力を悟らせながらも、体験的な「無力の息吹」を強調します。それは肩書や体験が悪というのではなく、自分の強化に用いるのが良くない。地位が与えられることで付随する苦しみもあり、助け手も周囲に見当たらず、陰府が口を開くような生と死紙一重の中で、救い主に会うこともあります。

創世記1章を基調に単なる説明に留まらず、被造物の卑小を強調に終らず、モチーフ天&地上&地下の三層を巡る、三位一体の神のダイナミズムを描き出します。ヨブは芸術家&空想家に非ず、壮大な霊の世界の絵巻の一部を語るに過ぎず、「これらは神のみわぎの外側にすぎない」(14節)とその深遠さを語りますが、「私たちは…」からヨブは三友人と、立場的に何ら変わらないと強調します。被造物である人間の自己像は、創造主なる神を知り賛美することで形成され、ヨブは高ぶりも卑下もしていません。ヨブにあって三人に無いのが賛美です。知識や口先だけでなく諸楽器でも足りず、「息のあるものはみな」賛美せよが、ハレルヤ詩篇の結論です(詩150:)。呼吸する如く賛美を発するのが本質です。どれほど深い所からか。身の周りのことがうまくいき感謝するのは初心者で、苦難が転換点となります(詩120:1)。ヨブは体験的に解放と賛美を捧げます。

ヨブのように苦難に追い込まれつつ、神との交わり&賛美が純化されます。すると固執していた名誉や計画を武装解除して、自分がいかに地上のことに囚われていたか痛感します。そして以前と違う所から賛美が沸き上がります。彼の賛美は三層&三位一体で包括的です。私たちもみわぎの外側を押しつつ、内住のキリストにより、御心の内側を自分の変革を通して垣間見ていきます。

7月28日

「知恵への道」

ヨブ記 28:20-28

武安 宏樹 牧師

三友人との対論が前章で終了、本章は著者の挿入ではないかと言われます。これまでを総括しつつ後のエリフ登場に、知恵の主題から橋渡しの役割です。「可愛い子には旅をさせよ」と諺にあるように、神はヨブを送り出しました。神の沈黙という耐え難い苦しみの中で、なおも神を求め示されたら悔い改め、こんな自慢の我が子を旅に出す神の心は、どれほど痛みに満ちていたことか。「知識もなく・・・」(38:2)は叱責に非ず、微笑みつつ不足を教える父の心です。

その不足とは何か。「地上」(1:8)でヨブに匹敵する者は一人もいなかった。すると彼の相手は神しかおらず、実際に土俵際まで追い詰めようとしていました。それしか出来なかったし、かくて信仰は深められ無益とはなりません。けれども難点は同じ土俵で全て決着をつけようと、金星を狙ったことでした。黄金や宝石に優って主を知りたいと求め(箴 8:10-11)、全てを売り払っても、生命に代えても、おぼろに見た天の御国の福音を買いたかった(マタ 13:44-46)。ヤコブの格闘は客観的に見れば負けなのに勝利宣告され、信仰義認と同様に、善行や戦いの褒賞として得られるものではないことを示します(創 32:28)。

「知恵はどこから来るのか。それはすべての生き物の目に隠され」(20 節) 神の知恵は隠されている。ヨブの本当に知りたかったこともそうでしたが、それが許せずに「あなた&私」契約関係の中で、全て明らかにしてほしかった。神の専権事項の中にヨブの側の落ち度も信仰の不足も、含まれてはいません。だからといって神の御心の全てわかるかという、人にはわからないのです。天から地上に注がれる垂直的な恵みを、ヨブは地上で水平的に知ろうとした。しかし知ろうとすればするほど摂理を暗くすると、彼の信仰を評価しつつも、優しく正されたのです。ここまで御自身に迫った信仰者がいたでしょうか。

私たちも地上において主を愛し、理由が分からなければ格闘するほど求め、献身的に生きましょう。されど分からず答えなく納得いかない時もあります。それは信仰の不足でなく、別の道筋が用意されているのではないのでしょうか。求める者に石で無くパンを賜る主は(マタ 7:7-9)、さらに優る祝福を備えます。

8月4日

「悩みの日に」

ヨブ記 30:16-19

武安 宏樹 牧師

前章ではヨブが過去の幸いな生活を振り返り、本章は現在の悲惨さを語り、自分の思いを吐露する3章とリンクしますが、その間に三友人と対論を経て、単なる自分の中でのつぶやきから、神に向けた嘆きへ方向性が深化します。「何で答えないのか！」と裁判官の胸ぐらつかんで、答えるまで座り込みます。人間関係と同じく、どんなに詰め寄られても真実を言わないことがあります。神が沈黙される隙間を埋めようと、三友人が自分の思ったことを言いますが、水掛け論に終始して溝は深まるばかり。こういう時は祈るしかありませんが、ヨブは3章では暗中模索だったのが、今や一筋の希望の光を見出しています。

16節は訳出が難しいですが、自分の心が自分の内に溶け出して落ちるほど、生きる希望を流してしまう意味です。「メルtdown」は原発炉心だけでなく、心理学でも脳の選別機能が働かず、パニックになって壊れる症状に用います。「夜は私から骨をえぐり取り、私をむしばむものは休まない」(17節)と続いて、叫んでも答えが与えられず、自分の身に全てが降りかかる苦しみを訴えます。「何で自分だけ？」という疑問を私も持っていましたが、そのような苦しみの彼方に祝福の結果がいつも用意されていることを、改めて気づかされました。ヨブも好んで苦しむのではない。だとしたら悩み苦しみは選びではないか。キリストの似姿へ「苦難⇒忍耐⇒練達⇒希望」(マ 5:3-4)と変えられるのです。

使徒パウロは「神の恵みを無駄に受けないように」(Ⅱコリ 6:1)と言いました。死んでも生き、悲しみでも喜び、貧しくても富むのが、キリスト者人生です。私たちが踏み台となって多くの人が恵みを受けたら、何と素晴らしいことか。パウロは自分を神のしもべとして推薦しますが、苦しみが弱さに根差しても、そこに恵みは十分とあります(同 12:9)。私たちは今抱えている悩み苦しみが、いかに苦しいものであるか切々と訴え、そこから解放を訴えるものですが、祈り求める先にはイエス・キリストがおられます。主イエスが私たちの罪のためどれほど苦しまれ、永遠の祝福をもたらしてくださったのかを覚えて、ヨブのように嘆きながらも、パウロのように死と復活の御霊に生きましょう。

8月11日

「イスラエルにもない信仰」

ルカ 7:1-10

入江 告 師

礼拝の中でクリスチャンとノンクリスチャンの差は見た目ではわかりません。ですが聖餐式の時にその違いが明確にされます。ではその違いは単なる儀式の問題でしょうか。本質的な違いは何でしょうか。

イエスさまはその違いの本質、信仰を直球で語っています。イエスさまは百人隊長の信仰を見て、「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがない」(9節)と群衆に言われます。その多くがユダヤ人だったでしょう。ユダヤ人にとって百人隊長はイスラエルを抑圧するローマ軍の手先であり、明らかな異邦人でした。いくら会堂を建ててくれたとはいえ、異邦人とユダヤ人の違いは常に意識されていたでしょう。一線の向こう側にいたと思われたこの百人隊長が、イエスさまによれば、実はこちら側にいて、しかもその場にいたユダヤ人の頭上を超えてイエスさまの一番近くにいた。大きな驚きでした。

この名もなき百人隊長は確かに良い性格の人でした。ユダヤ人を愛した、とユダヤ人から言われるほどです。しかしイエスさまはそのことに心動かされたものではありませんでした。

百人隊長は①自分の罪深さを知っていました。②奴隷のためにイエスさまに掛け合う愛と大胆さがありました。そして③どんなみことばにも従う覚悟がありました。軍において隊長命令には部下の命を左右する力があります。ですから彼の覚悟というのは自分の命や人生がイエスさまに左右されても良いという覚悟でした。

しかもこの隊長は誰かに言われたからイエスさまに従ったのではなく、従うことが最善である、この道しかないと信じたから従ったのでした。主よあわれんでくださいというあなたの願いを、主は聞き、受け止めたいと願っています。

8月18日

「だれが訴えるのか」

ヨブ記 31:35-37

武安 宏樹 牧師

ヨブの独演会最終章。小畑進師の分類によれば①色情②虚言③貪欲④姦淫⑤奴隸無視⑥貧者への無情⑦黄金崇拜⑧偶像崇拜⑨敵への憎悪⑩客への非情⑪罪の隠蔽⑫土地の不正利用。以上の罪群に彼は100%潔白だと宣言します。その合間に挿入された35～37節は、神による無罪宣告状と原告の告訴状とに、彼がサインし両者が白旗挙げることで、労苦が報われることを願っています。これまで三友人の粗探しや因果応報の惑わしと戦って、無罪を確信した直後、誰にも理解されなかった孤独や信仰の熱情、他方では神への疑問と人間不信。複雑な心情は「もはや誰も私を非難できない」唯我独尊へ彼を駆り立てます。

ある意味でヨブは受けなくてよい試練に巻き込まれた、被害者と言えます。次章以降でエリフが指摘するように、結論から言えば霊的高慢がありますが、そう断罪する前に彼がどれほど傷つき、自己憐憫に陥り、神経質になったか、そのようにして落ち度を意識し善行を積む中で、自分に意識が向いてしまう。そこで一歩立ち止まって主を見上げよと、私たちが問う資格は無いでしょう。神を求めつつ無意識のうちに自分を庇う。純粋であってもズレが生じている。地上では最高の義人も(1:8)、最初の人が墮罪に陥ったゆえ逸脱しています。御心と違う道を自ら選び取った罪人は、子々孫々心の底まで黒くなりました。

この時に惑わしを与えたのがサタンでした(創3:5)。罪人の性とは霊の目開かれて「神のように」なり、三位一体の交わりに入りたがることと知ります。ヨブは二つの書状を手に神になる承認を求め、背後にサタンが介在しました。よって神の守りが彼を覆っている一方、サタンは彼を足場に機を窺っていた。罪の語源は「的外れ」ですが、「義人はいない」(マ3:10)彼も例外ではなかった。墮落以降に神と人との間に引かれた一線は、ヨブも越えられなかったのです。にもかかわらず強行突破を試みた彼は、サタンに素手で戦う愚行を犯そうと、危険な状態にいました。そこで直後に神はエリフを遣わして、制したのです。この戦いはキリストの十字架で最終決着。血の代価で一線を越えられました。新約時代「キリストの御名によって」祈るのは、キリストだけが贖い主であり、終末の時代に「大能の力によって」サタンと戦い抜くための宣言です(エペ6:)。

8月25日

「その道は、価値ある道だから」

I コリント 15 : 30-34

伊東 勝哉 師

パウロは、「なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか。」(30 節)と言う。

この「なぜ？」に注目したい。

彼は、キリストに出会ってから迫害や困難の日々。更に愛する教会の問題がいつも心を締め付け、悩みと苦しみと涙、そして眠れない夜…。

しかし、日々主から受ける恵みと感謝も尽きなかった。

福音により魂が救われ、教会が御言葉によって建て上げられ、祈りとキリストの愛の交わりを喜ぶ魂が増えていくことをいつも神に感謝していた。

常に「主にある喜び」と「主にある苦しみ」の両面があった。

更に「主にあるやがての希望」が明確にあったから、「エペソでの獣との戦い」(32 節)と記す死を意識するほどの苦しみを通っても、彼は主を見上げて生きていくことができた。

愛する兄弟たちの内に結ばれる実を誇りとしつつ、一方で自分自身は、「日々死んでいる」と言う。それはまさに、神と隣人のために日々自分に死んであらゆるものを捧げて歩まれた主の愛の道。

それは、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」と刹那的で、快樂主義に身を投じるような儚い生き方ではない。

この道で倒れたら本望と思える希望に満ちた永遠の世界に続く価値ある道。

パウロは、地上の人生も死んだ後のことも全く憊むことなく自分をマラソンランナー、格闘家にとえて言った。

「私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません」(9:26)

この世と悪魔の嘘のささやきに惑わされ、罪を犯すことなく、正しい生活を送りたい。

この地上での生き方はやがての永遠の世界に繋がっているものだから。

自分に問いかけたい。

今の私は、神の御言葉に基づく本当に価値ある道を歩んでいるか…？と。

9月1日

「神に指図する者」

ヨブ記 36:22-33

武安 宏樹 牧師

三友人の対論三巡目のエリファズに対する返答です。「私の嘆きは激しく」二巡目のヨブのパワーアップは何処へ、振り出しに戻り沈んだ感じがしますが、実際は天の証人に励まされつつ、掴みきれぬもどかしさが駆り立てています。「どこで」(3節)「どうしたら」(共同訳)「何処にか」(文語)神に会えるだろうか。「訴えたい」(4節)は、他の箇所では「責める」(5:17/6:26)とも訳されていますが、自分の正しさを立証するために論じ合いたい。これは三友人は理解不能です。しかしヨブは弁護士に付き添われながら、二人三脚で神の沈黙を責めます。三友人にしてみれば神と人との関係は、「嫌だったらクビ」の労使関係ですが、ヨブは神と人との契約関係から、代行者として栄光を現わす務めを重んじて、引き下がっては契約不履行だと、神はさばかない方だと信じて追い詰めます。

私たちはヨブの如く神と論じ合う覇気はあるでしょうか。罪を犯さないで、神に叱られず、為すべきことを為せばそれで良しと考えていないでしょうか。神との格闘といえばヤコブでしょう(創 32:)。彼は要領よく生きてきました。しかしその代償として因縁の兄が待ち構え、恐れから策を練り一人残ります。自分の知恵で生きる限界を覚え神の前に出て、裸になって砕かれたかった。そこで神は御使いとの格闘を備えて、戦闘不能になるまで夜通し戦いました。「負けるが勝ち」陳腐な表現ではなく、玉砕覚悟で戦いの彼方を渴望しました。恐れや罪意識と戦い自我と向き合い、そして敗北の結果、彼は新生しました。「死んだ者は、罪から解放されている」(マ 6:7)身の安全と現状維持を願っては神に出会うことはできず、生と死を賭けなければキリスト者とは言えません。

、「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マ 16:24)ヨブもヤコブも自分を捨てて、自己中心で不十分でも裸になって神と戦った。格闘と言っても単なる喧嘩腰ではなく、御言葉通り粛々と息子に手をかけたアブラハムも、洞穴で王と遭遇の絶好機に部下の勧めを拒み王に手をかけず、御手に委ねたダビデも、滅びるなら本望と腹を括り神の土俵に上がりました。このような祈りにおける格闘無しには、御手の深さを解せず一皮剥けません。ヨブは神が小さき者を省みさばきを免除すると期待し、テーブルにつきます。臆することなく神と人に関わることで、ヨブは三友人のタブーを打破します。

9月8日

「神に造られた者として」

ヨブ記 33:4-6

武安 宏樹 牧師

エリフの説得内容は、直前のヨブ独演会への応答となっています(27:2-7)。客観的な罪の有無はともかく、意地でも無罪を勝ち取ろうとする精神状態は、心無い三友人の非難や神の沈黙に対し、防衛本能に満ちて硬直した霊性です。この期に及んで信仰を保てるのは驚きですが、心の扉が閉ざされ主観的です。そこへカウンセリングを委ねられたエリフは、同じ目線に立って直言します。自分が義なら神が悪いと際限なく争い、結果的に自分を神とする罪があると。結果的ということは根に問題がある。原因は神と人との「関係性」にあります。「神＝創造主」「人＝被造物」基本中の基本の教理を、エリフは今更説きました。神と人とが一線引いた上で親しい交わりをする、相互の立ち位置の再確認で、ヨブは苦難からあまりにも神に近づきすぎた結果、自分を神の化身として、自分の中に神を押し込め、自分で自分の首を縛る自縄自縛に陥っていました。

「あなたも私も土から造られた者。神のいぶきで栄光を顕わす存在なのだ。」エリフは基本中の基本を説くことで、ヨブを人としての原点に戻そうとした。罪の指摘は三友人もエリフも同じですが、中身は「行為」と「関係」で全く違う。ダビデの姦淫罪は行為で捉えがちですが、ナタンは悪魔への隙も指摘します。神と人との愛し合う関係性に、高慢や不信などの足場を築かれ亀裂が生じて、結果的にヨブは罪を犯したに等しく、自分で神をコントロールしようとした。たしかにサタンは「いのち以外」、財産&家族&健康&交友&名誉だけでなく、神との関係自体は奪えずとも、その霊的健全と内的平安までも奪取に成功し、ついには「義人」の名誉をかけて訴状を手に、神に突進せんとまで追い詰めた。本章でエリフが語ることは、ヨブへの非難でなく延々と神論です(14-30節)。神がどのような方か。災いから遠ざけ高ぶりを離れさせ、健全な関係のため、仲介者や御使いを何度でも送り、全能の御手で守る。その中にヨブも在ると、位置関係を整理します。現状は見えない神は、大局的な視点から愛で包まれ、人の知識&行い&祈りでも捉えきれない偉大さを、再確認してほしいと願う。その神に心を開くか自分の殻に閉じ籠るか。改めて罪の本質は自己中心です。神に造られた者は、いかに罪深くとも偉大なる主がキリストにあって救われ、聖霊の恵みを「追求」(ペリ 3:12)で十分です。神が私たちを捕らえたからです。

9月15日

「罪を犯さない利益」

ヨブ記 35:1-8

武安 宏樹 牧師

「私が罪から離れると、どんな利益が…」本当にヨブがそんなこと言うかとギョッとしますが、エリフはヨブに損得勘定を伴う打算的信仰ではないかと、迫ります。もちろんヨブは最初からそのような信仰ではありませんけれども、苦しみに追い詰められて心のうめきとして、本音が出てしまったのでしょう。受難前は自分だけでなく家族が罪を犯した「から」でなく、「かもしれない」と、個別に犠牲を捧げるほど、良くも悪くも罪を遠ざけることに神経質でした。かくて神は最高の評価をするも(1:8)、食い下がるサタンはヨブを丸裸にし、それでも神を信じる意味とは何か、必然的に問題提起される結果となります。

そもそもヨブが罪を遠ざけて神の義を全うしようとしたのは、何故なのか。ヨブが聖い恐れを持っているとするなら、果してどれくらい恐れていたのか。人類最高と評価されたとしても、それは神の目に完全無欠を意味はしません。あまりに厳しい試練を受け神に沈黙されるうちに、恐れが次第に低下します。「条件付信仰」が平時は首をもたげなかったのが、試練で浮き彫りになります。さらに打算的信仰は子が親に無心する如く、ナアナアな関わり方に堕します。「神＝創造主」「人＝被造物」の一線は、神と人の関係を遠ざけるように見えて、実際はそうでなく、ヨブは一線を突き詰めた結果かえって曖昧になりました。

どんな素晴らしい奉仕をしようが、罪を犯そうが犯さないように頑張ろうが、人がどうであろうとも神には関係無い。突き放した一言に反感すら覚えます。けれども覚えるべきはエリフは神の顕現に際し、御言葉を受け止めるための、そこで悔い改めて神の愛の大きさを悟る、あくまで前座に徹したことです。私たちが神をどのように愛するかと、神が私たちをどのように愛するかとが、完全には難しいですが出来る限り一致するならば、神は喜ばれるはずです。ヨブの心の奥には罪を犯すか否かで神の愛を試す、小心翼翼さがありました。私たちもそういう心があります。「全き愛は恐れを締め出します」(Iヨハ4:18) 神がまず私たちを愛してくださる。失礼な近づき方さえ愛の中にありますが、試練を通して愛を受ける人の器が、神の愛に似たものと変えられていきます。人間的恐れが愛によって砕かれ、真に神を恐れる者となる途上にいるのです。

9月22日

「神の愛による勝利」

ローマ 8:31-39

佐藤 紀子 師

① 「だれが私たちに敵対できるでしょう」(31 節)

神が私たちの味方です。このお方は天地を造られ、イエスさまをこの世に遣わされた神です。神は御子を惜しむことなく十字架につけ、私たちの罪の身代わりをされました(32 節)。

② 「だれが神に選ばれた者たちを訴えるのですか」(33 節)

イエスさまの十字架の贖いは完全です。救いに選ばれ、罪は赦され、義とされました。ただ神の恵みによるのです。

③ 「だれが私たちを罪有りとするのですか」(34 節)

死んだお方、よみがえられたお方。そのお方が今神の右に座して私たちのためにとりなしておられるのです。イエスさまは仲保者です。

④ 「だれが私たちをキリストの愛から引き離すのですか」(35～39 節)

「私たちが愛して下さった方」(37 節)私たちの罪の身代わりとなることを引き受けて下さった主イエス。この神によって私たちは勝利者となることができますのです。

神の一方的な恵みによって選ばれ、イエスさまの十字架の贖いによって、罪赦され、義とされ、苦難・迫害・危険・死さえも、味方となってくださる神の愛によって勝利することができるのです。この神に愛されている私たちを、だれが敵対・訴え・罪に定め、神の愛から引き離すことができるでしょうか。

9月29日

「神に指図する者」

ヨブ記 36:22-33

武安 宏樹 牧師

エリフの役割は、ヨブの自己義認によりサタンの惑わしに与する危機から、軌道修正し、神と相對する際に御言葉を受け入れる「お膳立て」にありました。だから三友人がヨブを下げるようなことは語らず、神の偉大さを語ります。誤りを強引に認めさせるのではなく、ダイナミックな神觀の渦の中に巻き込み、自分で塞ぎ込んだ心の扉を開かせるため、寄り添いつつ共に神を見上げます。されど寄り添うだけでは同じ穴に落ちますから、悔い改めを促すのも務めで、かりに失敗するとサタンの予告どおりに(1:11)、ヨブは神を呪うに至ります。そこで最終兵器として取り出したのが、「神のみわざを覚えて賛美」(24 節)で、あたかも心許せる友の輪の中で、共に慣れ親しんだ讃美歌を口ずさむのです。賛美は不思議と頭にこびりつき、人を巻き込み、自然と信仰告白になります。

本当の主にある友人はどのようなものか。エリフの関わりに教えられます。一つ目に聖書的に誤っていることは、相手の状況に拘らず指摘することです。真実は神を愛する者、神に愛されている者として、聖靈の促しで語られます。子が罪を犯して黙認すれば親もさばかれるように、兄弟姉妹の間も同様です。祈り熟考し聖靈と相談し平安を得て指摘するならば、主が責任を取られます。表現は不完全でしたが、滅びの淵に立つ友の救いを迫られ真剣に語りました。二つ目にハッキリ指摘するだけでなく、悔い改めといやしに寄り添うことで、エリフの場合は賛美でした。賛美の効用については先に挙げたとおりですが、自分の心の傷や人への怨念などを横に置き、一心に神を見上げないことには、沸いてきません。そこで賛美で神中心の視座から自分を捉えなおさせました。

「主は与え」+「主は取られる」=「主の御名はほむべきかな」。苦しむ一方と、思い込まずに、逆に苦難さえ恵みとして人間的理由を超えて与えておられる。苦難も恵みの中にある。だから賛美を捧げよう。かくて靈性を神へ向けます。ヨブはあまりに直接的な語りかけを求めて、創造と摂理の恵みを忘れていた。むろん賛美を知らなかった訳ではない。しかし自分の世界觀に囚われていた。光は雨雲の中に輝き、風が吹く暁には恐るべき威厳を見ると結びます(37:)。私たちは悩む友のために気休めでなく、塞がれた窓が開かれるように接して、賛美を神に対しては勿論、人と共に捧げて解放の恵みを味わいたいものです。

10月6日

「腰に帯を締めよ」

ヨブ記 38:1-3

武安 宏樹 牧師

神との邂逅。この時のためヨブは今まで苦闘してきました。義とされても、罪有りとされても、どちらかに転ぶかは二の次でただ御声を待ち望んでいた。これまで契約の主が突然姿を消した疑問、自分を理解できぬ友への不満など、あらゆる負の感情を起爆剤に、時に脱線しかけながら神追求に邁進してきた。あらためて神への愛、信仰への執着、孤独や攻撃に負けぬ胆力に脱帽します。そんな彼が「お叱り」を受けた。どのように「お叱り」を受けたのでしょうか。主イエス曰く湖に「黙れ、静まれ」(マコ 4:39)悪霊に「出て行け」(同 1:25)と違い、他のもろもろの被造物と一線を画した人間、まして愛の契約を結ばれた者に、言葉足らずでも知識不足でも、「わたしに示せ」と深い思いを引き出させます。4節以降は詰問するようでそうではなく、ヨブが語った「みわざの外側」から、神がその内側すなわち創造と統治の実際を語り、彼の断片的な神観を拡げて、その圧倒的な愛のカウンセリングを受けつつ、彼は黙るばかりでした(40:4)。

「父がいとしい子を叱るように、主は愛する子を叱る」(箴 3:12)愛の叱責から子は我が身を恥じながらも、慰めと励ましを受けて父に学ばねばと願いつつ、神と隣人を愛するより自分の評価を気にする、弛緩した霊性を引き締めます。人から叱られても聞かないような者は、神に叱られるしか方法がありません。「みことばの戸が開くと、光が差し、浅はかな者に悟りを与えます。」(詩 119:130) 表面的な知識ばかりで見えてこなかった本質、やりすぎた人の言葉が判り、悟っていたようで毫(ごう)も悟っていない現実に、「私はつまらない者です」(40:4)ヨブの嘆きが聞こえます。仏教で悟りの無い人間の迷いを「無明(むみょう)」と言います。「摂理」を暗くするとありますが、「主の計画」(共同訳)の方が意味が近いです。御託並べ時に僭越な態度で神の前に出て、聖霊の内住が暗くされてしまった。そんな自分の暗さ、神の栄光を放つようで放てぬ自分に彼は気付かされます。されど御言葉は罪を照らせど、さばくことのない明るく優しい希望の光です。

夜明けの光差し込む時、「さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ」と、促します。ヨブにはゴールのようで、エレミヤにはスタートでした(エレ 1:17)。我々キリスト者はサタンの攻撃に抗し、宣教の戦いのため帯します(エペ 6:)。暗い自分が照らされた喜びで、闇の世を照らし人を照らすため立つのです。

10月13日

「イスラエルにもない信仰」

ヨブ記 40:1-5

武安 宏樹 牧師

前回は神が嵐の中から、ヨブが全能者と争うのに創造の神秘をどれほど知っているのか、あなたがそれをできるのかと矢継ぎ早に責めておられます。責めるといっても、断罪ではなく神が神であることを御業から証しされます。「ああ、私は取るに足りない者です。」「ああ、私はつまらない者です。」「(3節)天に向かって背伸びしていたヨブが、打ち砕かれて全面降伏する転換点です。たった一言に、本来あるべき神に造られた者として自己認識が凝縮されます。怒濤の御言葉に打たれながらのカウンセリングで、謙虚さと共に腑に落ちた。自分の間違いに気付くだけでなく、神の側の謙遜さに心開かれいやされます。

「つまらない者ですが・・・」「小生は・・・」謙譲語は自分の実際の資質以前に、人間関係が円滑に運ぶよう人為的に下げますが、ヨブはこれが本音でした。本音といえ彼らの生き様は試練の前でも最中でも、偽ることがありません。ところが信仰の純粹さを貫いた結果、神のしもべとして完成かと思いきや、それが仇となって落ち度がないのに神の敵となった。これが人間の限界です。されど限界まで神を求めた結果、自分の努力でなく天から伸びる梯子を見て、「ああ、私はつまらない者」と本音が出た。土俵に上がれば横綱と幕下ほどの、歴然とした差があり、観戦する友人たちもよせばいいのにと苦笑しています。

力を尽くして戦った末に「取るに足りない者」と実感し、弟子入りを志して、師匠の偉大かを痛感する。対する横綱の方は生意気だと門前払いなどせず、懸命さに感銘を受けて、他に取りられないように自らスカウトに来てくれます。観ていた友人たちは後悔します。自分の努力だけで大成する天才は皆無です。限界を知り砕かれつつ、先達や環境の恵みを覚えつつ、一歩ずつ学習します。ヨブ自身が神を恐れるしもべであることは、神もサタンも同意していますが、逆に試練が無ければ、世では認められても表面的な信仰に終わったでしょう。極論すればヨブを試練に駆り立てたことは、十字架に次ぐサタン最大の失策。砕かれて本音から悔い改めることほど、サタンにとって不都合はありません。ペテロは罪深さの自覚から(ルカ 5:8)、主に手を引かれ御業を目にし(ルカ 5:10)、キリスト告白に進ませます(マタイ 16:16)。ヨブも「私の救い主」確信に至ります。

10月20日

「勇敢に戦う」

I テモテ 6:7-12

吉兼 剛 師

① 序論

人間は産まれる時、何も持たずに産まれてきます。また、死ぬ時にも何も持たずに死んでいきます。

今、世界に目を向けると飢餓状態が問題となっています。その一方で、人間は物から物への欲求が次から次へと駆り立てられる時代の中であって、聖書では満ち足りる心が必要と言っています。

②本論：金持ちになることへの警告

イエス様は「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうが難しい」と言われました（マタイ 19:23）。今日の箇所では金持ちになると愚かで有害な多くの欲望に陥ると書かれています。金銭を愛することは悪の根源になるということです。事実、金銭を愛することで信仰を捨ててしまうケースもあります。神様からのプレゼントの価値を失ってしまいます。

③ 結論

金銭を愛することは誰にでもあります。そのことを知りつつ避け、義と経験と信仰、愛と忍耐と柔和を追い求めていくことが大切です。御霊の実（愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制）は神様からのプレゼントです。しかし、私たちはこの御霊の実と真逆の中で生きているからこそ、求めるものではないのでしょうか。さらに神様は信仰の戦いを立派に戦いなさいと勧めています。立派に戦うとは前向き、そして積極的に戦うということです。信仰の戦いは人を傷つける戦いではありません。その目標は神の栄冠を求めて走る続ける戦いです。困難・苦難の中で戦うことで神様は応えて下さいます。

10月27日

「河馬を見よ」

ヨブ記 40 : 15-24

武安 宏樹 牧師

神からヨブへ第二の問いかけです。前章では動物図鑑を見ているかの如く、自然の生態系の裏話を明かされますが、以上各論について知恵の披瀝に非ず、創造の神秘や統治のタイミングから、「一対一」に狭められた彼の視野を拡張、人は最高の被造物といえども、その影響下で生かされることを想起されます。「井の中の蛙(かわ)大(ず)海を知らず」世の中で出世したり神学校の学位を取るくらいで全て知ったかのように人は高慢になる。ヨブも同様に神に指摘されましたが、謙遜になるために平面的な価値観を砕かれて、立体的になる必要があります。そこへ「河馬(カバ)」登場。他では「獣」などと訳しますが、複数形で尊厳を表します。あの水と陸を行ったり来たりする獣ですが、動物園の個体は飼育で大人しく、観客がエサをあげたり触れたり出来るそうですが、鋭い犬歯で野菜を粉々に。実際は神経質で縄張り意識が強く、ライオンでも鰐(ワニ)でも応戦する獰猛な面も。一方で 150 度開いた口に小鳥が休めばそのままに、平和愛好家の側面もある。野生はアフリカのみ生息も、鈍重で俊敏、平和で剛毅、水陸両用と優秀です。

動物にも人間同様に心があります。逆に動物に無いのは宗教&道徳性です。されど見方によっては人より賢い。神の恵みの中で依存して生きるからです。太陽と雨で植物が育ち、それを草食動物が思いのまま食べて、さらにそれを肉食動物が食べる。地上だけでなく海も同様。かくて食物連鎖が成立します。それにひきかえ人は神の似姿として霊性を備えられ、神と共に生きる特権を与えられても反抗して高ぶったり落ち込んだり、勝手に他の神々を拝む始末。身勝手な殺人は古今東西絶えません。人は神から離れると空しい存在です。ところでカバは自然界に身を任せ生きているが、ヨブよあなたはどうか。「慌てない」「動じない」カバ以下なのか。捕獲に難しく捉え所の無い獣ですが、水陸両界を行き巡るさまから、神の配下の御使い&サタン配下の悪霊などの、軍勢が神の御心の実現を巡って、地上&天上&地下の霊界を攻防するさまを、連想させたのではないか。人知を超えた霊的戦いの全権を有する方は神です。カバのように悠然とは生きられない、私たち人間は獣と違う宗教的存在です。蠢く(うごめ)霊的存在を全て従わせた方が、主キリストであることに感謝しましょう。

11月3日

「怪獣の正体」

ヨブ記 41:13-34

武安 宏樹 牧師

神からヨブへ第二の問いかけの続きです。レビヤタンは個体では鰐(ワニ)ですが、神にさばかれる敵対勢力(詩 74:)、アッシリヤやバビロンを暗示など(イザ 27:)神話的怪獣「誇り高い獣すべての王」として戦慄の姿が示されます(18-25 節)。鰐は捕獲も料理も皮革利用も可能ですが、レビヤタンは太刀打ち不可能です。むしろ「竜」の方が近いですが、驚くことにそのような不気味なものでさえも、本来は祝福を受くべき被造物とされ(創 1:21)、神の対抗馬とは成り得ません。「神は悪魔も創造したか」の解答で、最後に敗北が定まっています(黙 19-20:)。ヨブには試練におけるサタンの介在について、神に伝えられませんでした。レビヤタンをも屈服させる神の御手を示すことで、終末の壮絶さを証します。

原典は本章 1～8 節は前章の続きとなって、カバとワニが連続しています。アフリカで水場をめぐる両者の攻防の壮絶さは、巨大なカバに軍配が上がり、鰐はスゴスゴと退散します。私はカバの姿に世の中の巨大な社会的権威を見、レビヤタンに「だれかを食い尽くそうと探し回る」(I ペテ 5:8)悪魔を見ます。世の中は単体では攻めませんが、その社会の価値観を脅かす者に牙を剥いて、エレミヤが嘘つきと言われ、主イエスが敵意を抱かれたように締め出します。レビヤタンは悪魔の化身として、神の栄光を阻害し人を餌食に引きずり込み、自分の名が崇められる王国を築くべく、終わりの時代に最大限抵抗をします。以上にキリスト者は御名で立ち向かうべきですが、霊的な存在ゆえ厄介です。

神が言わんとしたことは、そのような得体の知れない敵と素手で戦えるか?わたしでしか出来ないことがあるのだと、神のさばきの真実を語られたのです。ヨブは神に近づこうとするあまり、無意識のうちに悪魔に接近していました。ちらつかせる世の権威と栄華は、ひそかにヨブや私たちが求めていたもので、「下がれ、サタン!」(マタ 4:10)と撃退できない者は、神の右の座には就けません。唯一ふさわしい方はキリストのみ、あなたは愛の中に居るべしと語られます。怪獣の正体を暴かれて、ヨブは神が語らずとも悪魔が蠢いていたことを知り、そして自分も踊らされていたことを知り、無知を恥じて愕然とするのです。謙遜に非ずば霊的戦いの端緒にも就けないと、ペテロは語ります(I ペテ 5:8)。私たちは神に近づきつつ、キリストのみ勝利者であると絶えず覚えましょう。

11 月 10 日

「すべてができる方」

ヨブ記 42:1-6

武安 宏樹 牧師

本書最終章。これまでの苦闘と疑問と論争と願いの答えがここにあります。初めに「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。」(1:21)告白し、以降「取られる」ばかりで与えられるものが無い。果してあれは何だったのか。1 章と 42 章の告白と、断絶されたような中間が全てつながり腑に落ちたのが、「あなたには、すべてのことができること、どのような計画も不可能ではない」ここに全てが集約され、孤軍奮闘も心無い友人の言葉に意味を見出すのです。

私たちは神が全能の方で、私たちの人生に幸いな計画を持っておられると、知っているだけでなく、体験的に摂理の御手を信頼して生きようとしします。その体験の深化に信仰者の底力が問われます。過去の記憶をどう受け止めて、欠けだらけの現在に働く聖霊が、神の計画を成し遂げられると信じられるか。そのために明け渡し(=私)が必要で、黙想のうちに闇に光を当てることです。ヨブも傷ついてきましたが、聖霊が見せる全体像の中で自分が分かりました。

この告白が最高の告白ならば、私たちの罪とは神の御手を妨げることだと、分かります。個別の罪は無くとも神と対決しようとして結果的に壁となった。真に神に向き合うことで罪が示され、澄み切った心で小さき者と知りました。「知識もなしに摂理をおおい隠す者はだれか。」(3 節)「摂理」=「道」(文語訳)。神の通られる道筋を塞ぐなどと誰が知るのか。ヨブが神に近づいたからです。近づかなければ惑わしも罪も分からないが、砕かれて愚か者と気付きません。

迫害者サウロは光に照らされ罪を示され、神と邂逅を体験しました(使 9:)。主を見たい。死んでも見たい。三友人と論争の中で得た確信です(19:25-27)。ヤコブ(創 32:)・モーセ(出 33:)・ギデオンの(士 6:)・エリヤ(I 列 19:)も適わず、それでもいつか自分の目で見ると、狂おしいほどの神への渴望でした。それによって三友人レベルの「耳学問&耳知識」が、「目学問&目知識」となる。まさに聖霊体験。神に近づいて倒されてまた起き上がる、死&復活体験です。「それで、私は自分を蔑み、悔いています。ちりと灰の中で」自己満足と対極の、悔い改めで結びます。ヨブの見た神は「取り去られ、与えられた」キリストで、十字架の御業に神の全能を見つつ、私たちは御名により大胆に近づくのです。

11月17日

「十二弟子の伝道派遣」

マルコ 6:6b-13

入川 達夫 師

主イエスが十二弟子を福音宣教に遣わされた記事から、私たちは主の弟子として宣教をどのようにすべきかについて学び取ってみましょう。

I. 主が福音宣教に遣わされる時

イエス様は故郷ナザレでの伝道の後に、十二弟子を遣わされました。ナザレでのイエス様に対する反応は神様の御業を制限される程、拒絶され、さげすまれたほどでした。イエス様はこの不信仰に驚かれました。しかし、拒絶される中、イエス様の救いの思いはますます熱くなりました。イエス様の愛は人々の心を砕くものがありました。その愛を見習って欲しいと願い、弟子たちを遣わされました。福音の根底にあるものは愛です。福音を語る事は愛が試されるものです。自我が強くなると相手から拒絶されることが多くなります。

II. 福音宣教に携わる者に求められる信仰

伝道は自分が無力であると知った時、主が用いて下さいます。語る中に知識・才能などが入ることによって自我が強くなってしまいます。伝道は100%主に頼っているかが試されます。語る言葉は聖霊が与えて下さいます。

III. 福音宣教における聖霊の働きと喜び

伝道を行う時、聖霊が働かれ、通りよき管として用いられるから、自分を明け渡す必要があります。今日の箇所では1軒の家にとどまりなさい。と書かれています。とどまることでその家の人とずっと交わりができます。そしてその人との信頼関係が築かれます。福音とはその人の生きざまそのものです。骨の髄まで福音化されている事で相手に感化を与えます。

IV. まとめ～主の福音宣教者として用いられるために

- ①宣教の働きにおいて、主だけを仰ぎ、主だけを頼りましょう。
- ②主から受けた救いの絶大さに感謝と喜びをもって福音を宣べ伝えましょう。
- ③救霊の業の前進のために献身し、熱心にとりなしの祈りをささげましょう。

11月24日

「倍の祝福」

ヨブ記 42:7-17

武安 宏樹 牧師

本書最終回。「ヨブの財産をすべて、2倍に」「年老いて満ち足りた生涯」と、ハッピーエンドで締めくくりますが、これまでの登場人物が舞台に集結して、本書の謎が明かされます。その中でヨブと友人たちへの評価がなされます。三友人は因果応報神学に固執し、神のことばを取り継げず、断罪されました。彼らの言い分は間違っていないかもしれませんが、一面的で偏っているのが問題でした。対するヨブは裸でぶつかりながら砕かれ、勢い余って近づきすぎたけれども、神に向かう方向性はブレなかった。だから神観の広がりには大差がつかしました。翻って神学とは何だろうか。聖書釈義も組織神学も全聖徒に有益なことです。しかし神学的な眼鏡で人を断罪し優劣を決めたがる、高慢の誘惑もあります。ヨブは神学と体験が表裏一体だったので、結果的に正しいと評価されました。

けれども本章の主眼は、優劣でヨブへ軍配を挙げることはありません。次に命じられたことは、三人がヨブのもとに出向いて全焼の犠牲を捧げて、ヨブが祭司の役割を担うことでした。幸い双方が御言葉に従って行いました。四人がプライドやわだかまりを捨て主に従って、互いに仕え合う姿を見ます。この順番が重要です。ヨブがタテに祈りを捧げ、両手をヨコに三人と握った。その瞬間に神からヨブを通して三人に、聖霊が勢いよく流れていやすれます。狭い神学は砕かれて三人は初めて生ける神を知る。2倍＝縦&横の恵みです。だから神の主眼はヨブの勝利ではなく、他の者も遅れて恵みを知ることです。「この最後の人にも、あなたと同じだけ・・・」(マ 20:14)天の御国の価値観です。だから本書はハッピーエンドですが、恵みはエンドレスで続編があるのです。

その恵みは三友人に留まらず、宴席に招かれた親族&知人にも流れました。ヨブ⇒三友人⇒親族&知人へ、恵みが循環し渦巻いて天に返されていきます。妻の記述無しも子宝に恵まれたことから、悪名高き彼女すら恵みに漏れない。「元どおり」とは捕囚解放の意。そのようにヨブは捕囚の者を解放したのです。彼らは罪と向き合ってどのような心境か。背負いきれない重荷が圧迫します。だからこそ神は御子を送りました(マ 11:28-30)。ヨブは主イエスとくびきを共に負って完走し、だから神は彼の信仰を義とされたのではないのでしょうか。罪の中にある方は本書に充満する、キリストの苦難と栄光を仰ぎ見ましょう。

12月1日

「悔い改めの恵み」

Iヨハネ 1:5-10

武安 宏樹 牧師

キリスト者は罪赦された罪人です。アダムが御言葉に違背&墮落して以来、罪は義人と呼ばれた、ノア&アブラハム&モーセ&ダビデ&ヨブすら例外でなく、人類を死と審(さば)きと滅びの恐怖に縛りつけ、社会を苦い争いに満たしました。家庭内暴力&無差別殺人&性犯罪&盗み&詐欺メール等、神無き社会の構図です。しかし主イエスは「医者を必要とするのは、病人」(マタ 9:12)と言われました。社会的に認知された「丈夫な」パリサイ人に比べ、軽蔑された取税人&罪人は、絶望的に求めている。そんな彼らこそ救いに招かれていると主は言われます。義人も罪人も救いに招かれていますが、双方が素直に信じたとしたならば、苦勞するのは罪人の方です。それなら何故主は罪人を招かれたのでしょうか。それは主イエスが彼らに注ぐ愛情と更正能力に、絶対的自信があったからで、十字架の贖いの効力は、アダムの原罪～私たちの過去&現在の罪だけでなく、天に上げられるまで犯す罪に対しても解決し、聖霊が人格を造られるのです。

問題は どうしたら罪を犯さなくなるのか、罪から離れることができるのか。年数経てば知識も洞察も深まり、愛せなかった人を愛せるようになりますが、悔い改めが無くなる訳ではなく、当初は行為単体だったのが心の罪も悲しみ、さらに自分だけでなく他人への無関心を悲しむに至る。聖化の浸透に比例して、己の罪深さを悟ります。カトリックの告解は罪を列挙して司祭に赦しを得る。これでは悔い改めをしたかどうかの、結局は人間的努力にかかってくるので、いつまでも救いの確信が得られず苦しみます。異を唱えたのがM・ルターで、神に近づく努力を途方も無く行うことは御心でなく、神の恵みに逆行すると、自ら悟りました。全生涯をきよめるのは悔い改めでなくキリストの贖いです。義人も罪人も入信も同じならゴールも同じ。あとは赦しの恵みに満たされて、地上の生活でいかに証しを為すかです。私たちは罪を犯さないと強弁したり、死ぬまで罪深いと悲観する必要もなく、隠すことも臆することはありません。「きよめてくださいます」は、血の効力が全生涯の聖化に及ぶことを示します。告白しても赦されないのではなく、「神は真実で正しい方」ゆえ赦されるのです。「だからこそ、私たちは罪を告白するすべての者に確固たる赦しを与えるこの約束を、心から受け入れなくてはならない。」(カルヴァン聖書注解 1章9節)

12月8日

「王なるメシヤ来臨の預言と私たちの信仰」

イザヤ 9:1-7

入川 達夫 師

アドベントのこの時、イザヤを通して語られたメシヤ（キリスト）来臨の預言の意味を学んでいきましょう。

I. 王なるメシヤ（キリスト）の預言が与えられた時代状況

当時のイスラエルの民は偶像に自分の問題の解決を求めています。悪霊に救いを求め、真の神様に背を向けていました。これは今の時代の人々にも言えることです。主なる神様はご自身以外のものを神として拝む偶像礼拝の罪を、徹底的に裁かれるお方です。

II. 王なるメシヤ（キリスト）の来臨の約束

私たち人間の罪の解決法はない中、6 節では救いの方法を告げています。「ひとりのみどり子が私たちのために生まれる。」神様はご自身の契約を貫いています。この契約は神様の一方的な恵みの内にあるものです。生まれるのは神様です。

III. 来臨される王なるメシヤ、イエス・キリストの名

名前はその人の性質を示しております。

①不思議な預言者：目を見張るようなお方、インマヌエル預言と結びつく時、不思議としか言えません。受肉はクリスマスの最大な不思議です。また、預言者と言っています。すなわち神自らが預言者です。知恵、知識そのものによって私たちの行くべき道、正しい道が示されます。私たちの魂もカウンセリングして下さるお方です。

②力ある神：イエス・キリストは人としての性質を 100%、神としての性質を 100%有しています。その力は死の底まで及んでいます。

③永遠の父：父は守る、頼もしい方。子を見守る父の様に様々なことから保護して下さいます。その中で最も大きな愛は私たちの身代わりになって下さいました。

④平和の君：困難の中で揺れ動くことはありません。命を引き換えに支えて下さいました。イエス・キリストの平和は永遠的な朽ちることのない平和です。

IV. 王なるメシヤとしてこられたお方にあなたの王座を明け渡しましょう。

12月15日

「橋を架ける人」

ピレモン 8-20

武安 宏樹 牧師

本書はパウロ「獄中書簡」に分類されますが、ピレモン個人への私信の体で、キリストの愛と教会の交わりを彷彿とさせ、牧会者の温もり満ちた手紙です。パウロが求めたのは愛の交わりでした。主人ピレモンと逃亡奴隷オネシモの、個人的な和解のみならず、血の通い合った交わりを期して働きかけるのです。

パウロが冒頭に「囚人」と名乗るのは本書だけで、使徒の威光を行使せずに、オネシモと同じ立場から、彼の代理人として頭を下げる謙遜のアピールです。たとえ肉体は囚われても、宣教の御霊の自由さへの確信の現われもあります。コリント教会などと違って、ピレモンの信仰に対しては高く評価しています。底流には彼への感謝と信頼があります(7節)。それは単なるお世辞ではなく、序文から神の「愛」をベースにしながら、胸襟開いた話を展開するためです。

8節から本論に入り、いよいよオネシモを受け入れるよう「懇願」します。当時は主人は奴隷の生殺与奪の権を有し、かりに逃亡すれば死も可能でした。敬虔なピレモンがそんなことをと思いますが、身の危険が無いとは言えず、少なくとも主人に恨みはあった。それでもパウロが戻そうとしたのは何故か。それは恩赦のような超法規的措置として、「愛」によって赦しを求めることで、それも強いられてでなく「自発的」(14節)な、ピレモンの信仰を試すためです。

そのためには「奴隷も自由人も」(Iコリ 12:13)とあるように差別を越えて、「主にあつて」結び合うだけでなく、双方共にパウロの弟子として「兄弟分」と、「肉において」結び合うべきと訴えます。複数の証拠を提示して外濠を埋めて、さらに負債の請求は私にとまで、そうすると残るのは純粋に愛の問題のみで、最後に「私の自筆」。パウロの押しの強さも、難しいチャレンジの証左でした。それはピレモンだけではなく、恐れるオネシモも画策するパウロも同様です。

それでも懇願するのは、三者三様ではなく一つの御体の建て上げのために、「生き生き＝エネルギー」が「交わり＝共同体」(6節)に、「愛」を通して盈満し、宣教の全身に資するためです。私たちは自分が誰かを赦すのは勿論のこと、他人の罪や傷も悲しみ祈り働きかける共同体に、いやしと解放が結実します。

12 月 22 日

「破れ口に立つ者」

エゼキエル書 22:30

武安 宏樹 牧師

本書は南ユダ王国滅亡直前の、王が先に捕囚に引かれる末期的時代でした。イスラエルなど神が潰せばよいのにと、私たちは無責任な思いを持ちますが、ノアの洪水で一旦滅びたのに同じ罪惡を繰り返す、本当に人間は愚か者です。しかしエレミヤら真の預言者は、迫害に遭いながら「破れ口に立つ者」でした。彼らは神の怒りと世の圧力の間で、ノア&モーセ&ダビデ&ヨハネにしても、苦しみながら神に仕え、ヘブル 11 章の信仰者列伝はそんな勇士達の系譜です。上記には登場しませんが、苦しみを戦い抜いた人ヨブも忘れてはなりません。神と個人的な格闘に見えますが、彼もまた破れ口に立たされた者だからです。いったい最初の「石垣」「破れ口」とは何か遡れば、アダム墮落で追い出された、エデンの園の裂け目ではないか。神が何事もなかったように補修をしないで、罪の傷跡に留め置く代わりに、そこから悪しき者が出入りをしないようにと、時が来るまでケルビムと炎の剣が守っています。強行突破すると危険なのは、バベルの塔やイゼベル軍団等、神の怒りで火だるまになるからです(申 4:24)。この炎は悪人を断罪だけでなく、実は義人も逆の意味で火だるまになります。

苦しみの中で姿を消した神を求め、追いやられるように破れ口に漂流した、「義人」ヨブは己を神とする最悪の罪を犯す手前で、御声を聞きます(ヨブ 38:)。そこで炎のように刺し通す御声の剣に打たれ、あわよくば三位一体に参加と、悪魔的願望は木っ端微塵と化します。神に近づく者は良い願望も悪い願望も、火によって清められます。彼らは好んでではなく選ばれて御前に追いやられ、それすらも神の賜物ですが、信仰を働かせて近づく者を神は愛し喜ばれます。エリヤは火の戦車で上げられるも、ヨハネの名で再び破れ口に立ちました。主イエスから最高評価を受けた修理職人は、ただ救い主を待望し喜ぶゆえに、前座&露払いとして全うし殉職。それでもこの犠牲は神の目に未だ不十分で、時至りてご自分の御子に人類の全ての罪を負わせ、これで神は満足しました。破れ口を守る火の剣は主イエスを燔祭とし、破れ口は天の門として開放され、もはや破れ口の補修作業完了。私たちは新たな天の門に一人でも多くの人が、通れるように努めます。かくて火の剣は聖霊としてキリスト者に降臨されて、私たちは天の門の出張所として、地上における破れ口に手を伸ばす存在です。

12月29日

「宣教の四つの領域」

使徒 1:8

全 志 碩 師

クリスチャンにとって大切な御言葉です。なぜなら、イエス・キリストが天に昇られる直前にくださった遺言のような言葉だからです。取り残される弟子たちはとても不安だったと思います。これからは誰に頼れば良いのか、弟子として何をすれば良いのか、わからなくなったのではないのでしょうか。そんな彼らのために、本節は誰に頼るべきか(前半)と何をすべきか(後半)について教えてくださっています。

まずは、誰に頼れば良いのかについて「聖霊があなたがたの上に臨むとき」。まだペンテコステ前、つまり聖霊が臨まれる前です。弟子たちは聖霊をまだ知りません。聖霊はどのような方でしょうか。聖霊は主を受け入れ、信じると告白した全てのキリスト者のうちに賜物として与えられ、内に住まわれると約束されたキリストの御霊です。その方は、時には私たちに慰め、御言葉を理解させてくださる助け主であると聖書は教えています。そしてその聖霊様はキリスト者として生きる力をくださる方です。本節前半の御言葉を通して、イエスさまは私たちが聖霊様に頼り、生きるように教えてくださっています。

後半の箇所です。四つの地域において「わたしの証人」となりなさい、と教えています。これは本節を通して私たちに託された命令であり、キリスト者として四つの領域(①エルサレム②ユダ③サマリヤ④地の果て)において、キリストの証人となる生き方をするように、教えてくださっています。

- ①エルサレム＝地域宣教⇒トラクト、路傍、関係伝道、教会内の様々なイベントなど
- ②ユダヤ＝国内宣教⇒三重県開拓、キャラバン伝道隊など
- ③サマリヤ＝特殊宣教⇒障害者、ホームレス、教育機関、キャンプなど
- ④地の果て＝海外宣教⇒宣教師支援、短期国外宣教、地域の外国人伝道など

大事なことは、これらの四つの領域を、四つ同時に満たしていくことです。教会もそうですが、個人でも四つの領域を満たす生き方が求められています。以上バランスよく満たすことで教会は健全に成長、個人の信仰は成熟します。四つの宣教の領域をバランスよく担っていくことで、愛宕山教会がますます成長していくことを祈っています